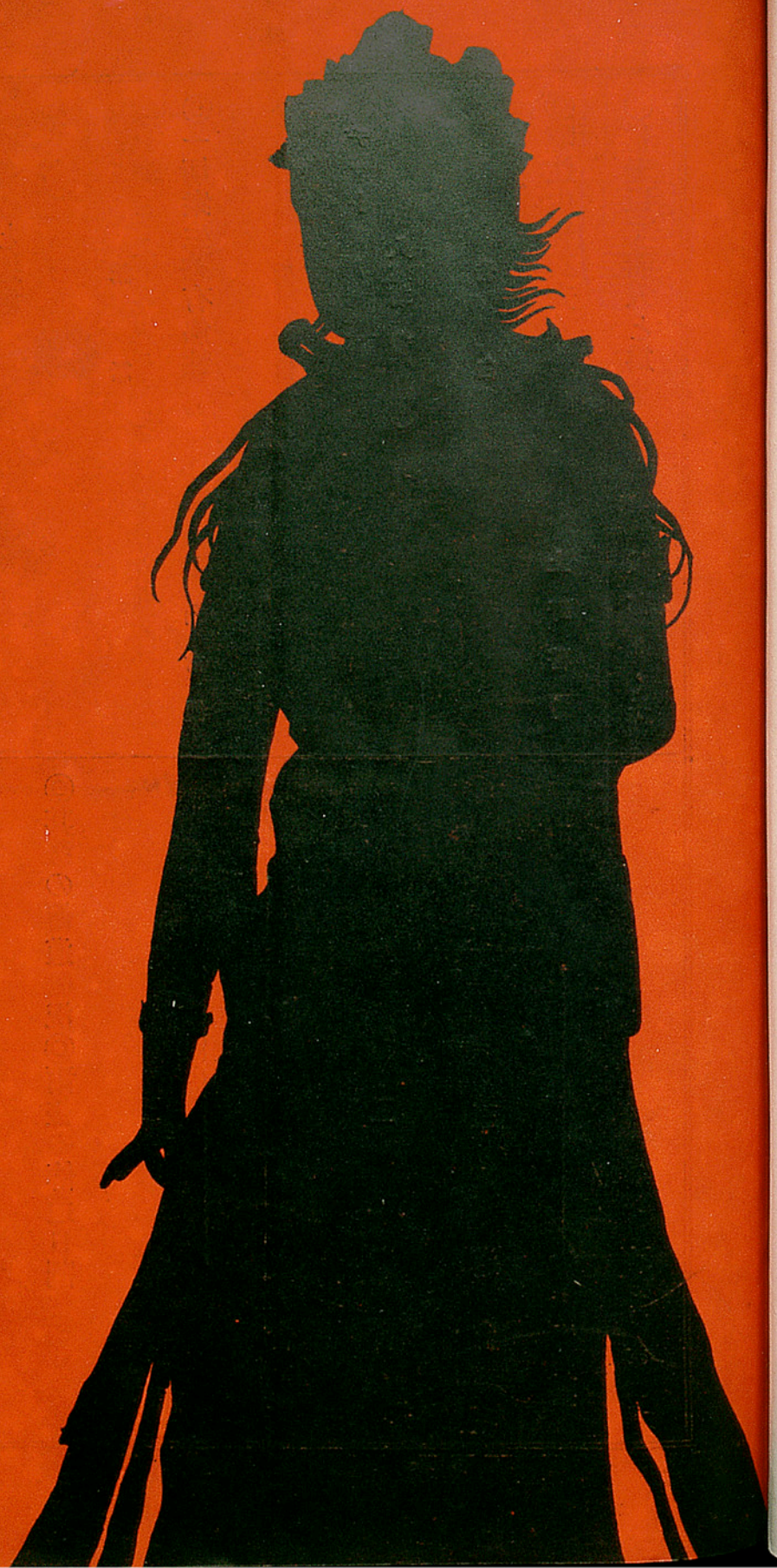
求道

第七卷
第六號



求道第七卷第六號目次

求道

◎横着心と遠慮心　近角常觀

講話

◎一切衆生悉有佛性　聖傳　近角常觀

◎ヂヤータカ釋尊傳　久遠刧の昔（承前）

告白

◎曇辻生絲衣夫人　上野啓造

◎信を以て能入と爲す　綾部りく子

雜錄

◎歎異鈔につきて　近角常觀

時報

◎其後の傳道概況◎爾後の傳道日割

講話

夏期中休講

求道學舍

第二求道會

第三求道會

求道　第七卷　第六號

横着心と遠慮心

親の慈悲に慣れて、惡しくてもよしとおちつけるは横着心なり、我の罪惡を氣づかひて、かく惡しくてはとあとゐざりをするは遠慮心なり、横着なるものは我身の罪惡を自覺せず遠慮するものは親心の眞實を知らざるもの也、而して罪惡を自覺せざるものは親心の眞實を知らざる也、親心の眞實を知らざるものは亦罪惡を自覺するを得ざる也、何となれば親心の眞實は此罪惡深重の我身一人を救はんとの大悲無限のやるせなき思召なれば也、是即ち選擇願心也、如來の淸淨眞實也、故に我親心を知れり、慈光を被れりといふとも、若し我罪惡を悲憐したまふやるせなき御心をいたゞかずんばいかでか眞實の親心を知るといふべき、かくまでやるせなき深き親の眞實をいたゞきてこそ初めて我身の罪業の深重なるとも思ひ知らるゝ也、久しく親心を痛ましめたてまつりしは畢竟我一人が煩惱熾盛なるが爲たりしを慚愧するのほかなき也、しかるに此深廣なる親心をいたゞかず、我身の惡しき程をも思ひ知らず、唯慈悲を被れりといひ、光明の中といひ、惡人をたすけたまふ本願なりといふ、畢竟これ如何程惡しくもかほはぬといふ下心にあらずや、罪を作るも惡を犯すも猶是慈悲の裡、光明の懷といふ、横着心にあらずや、恰も親に心配せしめ、苦勞を掛けたる放蕩息子が、猶放蕩をなしつゝ是慈悲也、恩寵也といふが如し、親は固より放蕩して可也と許すに非ず、其許すべからざる放蕩をなせばなす程大悲の矜哀はいや增さる也、犯すべからざる罪惡を犯すほど親の御心を傷ましめ奉る也、かくの如く、虛假不實、汚穢不淨の我等を飽まで救濟せんと誓ひたまへる御眞實に遇ひたてまつり、眞心徹到の一念、煩惱の氷解けて菩提の水となり、罪障の雪融けて功德の體となり、胸中の罪惡一時に懺悔の涙となり、八萬の煩惱忽ち口より流れ出てゝ慚愧の情止むへからざるもの、是こそ横着心を離れて親の眞實心に感泣したる姿也。

世の人々の性質に横着風の人と遠慮風の人とあり、されど結局に至れば横着風の人も横着心極りて遂には遠慮心を起すに至る、而して遠慮風の人も表面には修養謙遜の態度を表すると雖其、結局實に罪惡を自覺せざるが故に氣をもみながら、

其立場は畢竟横着心に止まれるを知るべし、たとへば如何なる罪惡でもたすけたまふと安んずるものは是横着心なり、若し平生事なき時は罪惡でもたすかる者と信ずと雖、一旦事あるときには、必ずや遠慮心を生じ來りて勿論罪惡でも助けたまふなるべけれど、成るべくは罪惡を少くして助からんと勵むに至るべし、是横着風の人も結局遠慮心に陷る有樣也、而して遂に罪惡を少くし得ざるのみならず、益々罪惡の深きに驚き、遂に益々煩悶に陷るべし、かくの如き我身のあさましきに泣き、人生のはかなきに悲むと雖決して罪惡觀無常觀とは名くべからず、此あさましきものを助け、はかなきものを救はんとの大悲廣大の御眞實をいたゞきて、此生死無常、罪惡煩惱が氣にかゝらぬやうになりたるとき、眞に心の底より我身は現に是れ罪惡生死の凡夫と自覺することを得べき也、是れ畢竟惡しきものでも助くるといへる本願に非ず、惡しきものをこそ助けんとの誓なれば也、この特に惡人を悲憫したまふ親心に遇ひたてまつりてこそ常沒常流轉、無有出離之緣の我等、渡りに舟を得、闇夜に燈を得たるが如し、無明長夜の燈炬也、智眼くらしとかなしむな、生死大海の船筏也、罪障おもしとなげかざれ、茲に始めて遠慮心の根が切れて罪業深重も浮き上り、氣づかひの心解けて願力無窮の御手に輕々と引上げられたてまつる、南無阿彌陀佛々々々々々々々々

されば横着心を離れて我身の罪惡を自覺すると、遠慮心を離れて大悲の恩寵に感泣すると、何れも畢竟罪業深重の我身一人のために苦勞したまへる無限大悲の親心を頂くに至りては一也、今大悲深廣の親心の前に横着心と遠慮心の離れたる實驗の披瀝として吾人は左の告白を反覆玩味するを禁ぜざる也、曰く、

謹啓、慚愧の至り奉感謝候、偖先般御慈誨を蒙るまでは、全く不肖は如來の光明に包まれ、佛の懷に抱かれ居るものと自覺(五六年前より)し、此信念は誰が何んと云ふても棄てること出來ぬ、否棄んとして棄て克はざるものと安心致し居りました、然し今から考へ見れば、此安心は何んだか奥の其奥に多少の雲翳を認めて居りましたが、不肖は此多少の不安ある其儘に安心して居ればよい、今日目前現實の動作の總てが佛事佛行であると已惚た實感で消光致居候、然るに先夜の御慈敎に依り、先生より未だ親に知らざぬ借金が殘留するとか、同朋に非ずとか、御示敎を蒙りまして一時非常に悶煩致しましたが、翌日原樣若先生より二三適

切なる御諭を蒙り、今まで不肖の强情我慢の爲め、己惚の爲め、佛恩の廣大無邊なることを忘れ居ることに氣附かして頂き、大に慚愧致申候、然し其際は未だ大悲の御本願に乘托する心も起りませなんだが、其翌朝(七月一日)突然平素聽き慣れて居りました『善惡共に汝の計ひは入らぬ、其儘來れ』の御喚聲に氣付かせて頂き、心中何時になく開け、電氣にても感じたるかの樣に愉快を覺ゆるのであります、而して當時執務しつゝも、何だか自然歡喜の心が胸一杯になり、頻りと涙を催すので人前がありますから、其れを出さぬと力むのも中々苦しい位でありました。丁度今までの胸中のもやくやしたるものが、歡喜心と入れ代つた樣になり、あまり嬉しさ、難有さにて却て心がソワ〳〵浮上り、用事もなきに再三西入寺樣へ參上して、種々御迷惑かけ申してまて益々深く喜ばして頂きました、實に今迄は御親樣の光明を盜み、御慈悲を掠めて苦んで居りましたことを懺悔し奉ると共に、御恩の絶大にして到底も報じがたきことを知らして頂き、何とも勿體なき次第であります、嗚呼こんな嬉しい、喜ばしいことはありません、嗚呼此喜びまでが御親樣の賜りものと氣附かして頂き何とも彼とも南無阿彌陀佛々々々々々々々

是れ人格高き我が有緣の一紳士が、嘗て我と法緣を結び佛を信じて以爲らく、佛陀は罪惡の衆生を憐みたまふこと、我の子を愛するが如し、子は親の慈心を知らざるだけ親は益々子を愛するなりと、而して其人は其忘恩の子たる地に立つことを忘れて、知らず識らずの間に自ら親の地位に立ちて、萬事は是れ佛事佛行と思ひたる也、故に自己の罪惡を自覺せずして漫に一切衆生光明の中にあり、恩寵の裡にあり皆御同朋也と自らきめこみて安んじたりし也、故に予之を誡めて曰、たとひ同一大悲の光明中にありと雖、自ら親を勞せしむる放蕩息子たることを自覺せざるものは親の眞實を頂かざるもの也、聖人は如來より賜はりたる信心か同一なればこそ御同朋とこそ仰せられ、未だ親の眞實に目を醒まさずして一切衆生光明中にあるが故に御同朋といふと雖、予は御同朋とは認めざる也、固より一切の衆生大悲の親より憐み給ふは平等なりと雖、衆生にして其大悲に醒めずんば未だ兄弟の名のりをなさざるが故也、さればこそ同一念佛無別道故の同じ御親の慈悲に歸命してこそ四海の人皆兄弟とこそ申すべき、君たとひ御同朋也とのたまふも、我は君が此御親の眞實をいたゞかざる限りは、

御同朋に非ずと警告したりし也。

且つ曰く、かくの如き立場に在りて強て自ら放蕩の子なりと覺悟せんか、其下心は、たとひ放蕩を爲すと雖親はすてざる也、たとひ如何程借金ありと雖、親は引受け呉るゝ也と、結局横着心に腹をすえ、罪惡ありてもよし、借金ありても引受けて下さるなりと腰を据へたる横着なる放蕩息子の態度也、此横着心はやがて必ず遠慮心にならざるを得ず、必ずや心中以爲らく、如何程罪惡ありてもかまはぬ、如何程借金ありても引受け下さるなるべけれど、さればとて我心中に潜める罪惡、隱匿せる借金までも打出すに忍びずとの遠慮心を生ずるなるべし、君よ日夜煩悶罪惡の起る毎に、必ず此の如き心にてはと自ら引きさがる心地なきや、是れ借金の殘留するに非ずや、是親に知らさぬ借金を自ら修養の力を以て自ら償はんとせる遠慮せる態度に非ずや、是れ即借金が殘留すると警告せし所以也。

かくの如く横着心はやがて遠慮心也、親の眞實を知らずして如何程罪惡借金ありと雖かまはぬといふ横着心は一變して、かまはぬに相違なきも隱匿せる借金までも委すこと出來ぬは即ち遠慮心に非ずや、此横着心も遠慮心も畢竟其人の性質、其場合の心持によりて左右彼此何れにも傾くと雖、畢竟大悲の親心の眞實を知らざれば也、廣大難思の御思召をいたゞかざれば也、抑々如來大悲の本願は如何なる罪惡でもかまはぬ、借金がありても引受くるといふ如き緩漫なる態度に非ず、其大悲の親は表面にあらはれたる罪惡借金に對して引受くるとのたまふに非ず、我等が最も苦しめる內心に潜める罪惡、隱匿せる借金を知ろしめして大慈大悲の御心やるせなく、特に其の罪惡借金を引受くべしとの本願也、衆の爲に法藏を開きて選んで功德の寶を與へ、特に隱匿せる罪惡を有せる横着なる放蕩息子、秘密の借金を抱えたる遠慮せる貧窮の我等の爲に積功累德したまへるが大悲の眞實也、親心のやるせなき心底也、是即ち罪惡深重の我等をたすけんとの大悲深重の本願に非ずや、我等此大悲の御親心の眞心徹到しぬれば、慚愧懺悔の念止みがたく、横着心の强情我慢の項折れて、知らず識らずの間、遠慮せる、もやくやせる胸中の秘密、奥の其奥に潜める罪惡借金は大悲の親より引き取られ、歡喜心と入れかはり、胸底の借金、醫積せる罪惡が自から解けて圓融滿足の大慈大悲の功德大寶海水となりたるもの是れ實に信樂開發の一念に非ずや、前記一編の消息實に貴き實驗の告白に非ずや。釋迦彌陀は慈悲の父母、種々に善巧方便し、われらが無上の信心を、發起せしめたまひけり。南無阿彌陀佛々々々々々々。

講話

一切衆生悉有佛性

（求道學會日曜講話）

近角常觀

一

今日の題は「一切衆生悉有佛性」といふのであります。「一切衆生悉有佛性」といふことは、一切の衆生悉く佛性が有るといふことで、佛敎では名高き言葉である。此の一切衆生誰でも悉く佛に成る可き種を持つて居るといふ事を申します。之は佛敎の上では常に言ふ事でありますが、我が親鸞聖人は此の一切衆生悉有佛性といふ事を次の如く御示し下された。聖道門の敎では一切衆生悉有佛性は、自分々々の身體に一人々々佛性が有つて、一人々々が悟つて佛に成るといふ意味なれども、他力の敎から言ふ時は、悉有佛性といふ事は然ういふ事では無い。お互罪深き人間が、此の度び佛に成れるといふは我々が自分の力で成れるのでは無い。此の者が佛に成らせて貰へるは、偏に如來廣大の御本願のお力によりて、頂かせて貰ふ處の御信心一つによりて初めて佛に成らせて貰ふの故、他力に於ては聖道門の悉有佛性とは大に異り、如來の遣る瀚無きお慈悲によりて我々信心を得、佛に成らせて貰ふ事が一切衆生悉有佛性であるとお示し下されてある。之は信心佛性と言うて古より名高い御敎化なれど、能く〳〵此の思召の程を頂かせて貰ひ度いと思ふ事である。殊に近頃は『歎異鈔』の第四章に於て

慈悲に聖道淨土のかはりめあり。聖道の慈悲といふはものをあはれみ、かなしみはぐゝむなり。しかれどもおもふがごとくたすけとぐることはまれてありがたし。また淨土の慈悲といふは、念佛していそぎ佛になりて、大慈大悲心をもて、おもふがごとく衆生を利益するをいふべきなり。今生にいかにいとをしく不便とおもふとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし。しかれば念佛もうすのみぞすゑとほりたる大慈悲心にてさふらふべき。云云。

とお示し下された此の御敎化は、茲の處をお示し下された御敎化ならんと、有難く色々の御緣によりて氣を附けさせて貰うた事故、此の事をも御話し致し度いと此の題を出したのであります。

之に就き第一番に申上げ度いのは、親鸞聖人が『信卷』、に信心歡喜乃至一念、至心信樂欲生我國、佛の御まこと心、お慈悲を頂いた一念に喜びの思ひが起る。其の如來廻向の信心の味ひを『涅槃經』に示された御文を以てお示し下されてある。其の御文を拜讀して能く茲の思召を頂かうと思ひまする。大層堅い御文なれど、

涅槃經に言はく、善男子大慈大悲を名けて佛性と爲す。何を以ての故に、大慈大悲は常に菩薩に隨ふこと、影の形に隨ふが如し、一切衆生は畢に定めて當に大慈大悲を得べし。是の故に說て一切衆生悉有佛性と言ふなり。

今の『歎異鈔』第四章と照し合はせて頂くと實に有難い。聖人

の思召では、大慈大悲を名けて佛性と爲す」といふは、人を哀み人に與へ人をはぐくむ事が佛性では無い。極樂淨土に往生させて頂き、思ふが如く衆生を濟度する事が出來る處で、初めて大慈大悲は現はれて來るのである。此事を聖人は此の御文の上より御覽なされ、大慈大悲は此の娑婆で得べき事では無く、淨土に參りて佛力によりて思ふが如く衆生を利益するを言ふ可きなりと御示し下されたのが歎異鈔の第四章であると氣附かせて貰ひ、「慈悲に聖道淨土のかはりめあり」の御教化は、茲から來た事と、熟々喜ばせて貰ふた事である。『歎異鈔』第四章の御教化は、普通では一寸分らぬ。何故此のやうな事を茲に特にお示し下されたかが分らぬ。されど聖人の御意にする時は、今の『涅槃經』の御文に「善男子大慈大悲を名けて佛性と爲す。……一切衆生は畢に定めて當に大慈大悲を得べし、是の故に說て一切衆生悉有佛性と言ふなり云々。」大慈大悲といふ事は、聖道門の意味にする時は大慈大悲を自分は行ふといふ事になるかも知れぬ、が思ふやうにならぬ。我々に夫が出來るかといふに出來ぬ。が「淨土の慈悲といふは、念佛していそぎ佛になりて、大慈大悲心をもて云云」此の大慈大悲といふ事は、我々が南無阿彌陀佛を頂く一念に、はや此の娑婆に居りながらちやんと佛に成る可き身にさせて頂くの故、此の世では思ふが如く助け遂る事能はずとも、はや其の一念に大慈大悲の種を獲得させて頂くのである。故に「一切の衆生畢に定めて當に大慈大悲を得べし、是の故に說て一切衆生悉有佛性と言ふなり」である。此の廣大の御慈悲を誰でも得る事が出來る故に、「一切衆生悉有佛性」である。我々此の廣大の御慈悲を頂く一念に、はや未來必ず淨土に往生して衆生濟度が出來る者と決まつてある、故に「當に」である。之を眞宗では當益といふ。實に之は難有い御文であります。

斯くの如く『敎行信證』と『歎異鈔』とのお示しにより、いつも此のやうな細かしい事迄照し合はせて喜ばせて貰うて居るが、之が只文句の上より慶んで居るのでは無い。私が『歎異鈔』の第四章の文に、殊に、氣を附けさせて貰うたは何時かといふに、七年前父に別れた時である。夫れ迄は「慈悲に聖道淨土のかはりめあり、云云」斯う迄冷かに言はずともと思うて居た。夫が彌々父の病氣によりて故郷に歸り、さて何うかして〳〵と思ひ、種々心身を傾けて考へて見ても、無常の世の中には何とも仕樣が無い。彌々時節來りし時は、其の一分一時の間と雖も人間の力では何ともする事が出來ぬと知らせて頂いた時、つら〳〵此の御教化を難有く味はせて頂いたのである。現在自分の親が病苦で苦しんで居る。代はれるものなら代はり度く思うて居ても、代はる事が出來ぬ。人間の習ひ、何んとも仕樣が無い。然ういふ人間が、慈悲とか、救ふとか助けるとか言うた處が仕樣が無い。一切衆生悉有佛性といふ事は、言葉の上は兎に角、我々實際にそんな事行ふ事が出來ぬ。煩惱具足の凡夫火宅無常の世界は、よろずのこと皆もてそらごとたはごと、まことあること無きに、唯念佛のみぞまことにておはしますとこそ仰せは候ひしか」。我々が此の世に於て何で安心し、何で大慈大悲を得させて貰ふ事が出來るかといふに、「唯念佛のみぞまことにておはします」、此の一言である。

夫故氣を附けて言ふに、『歎異鈔』の第四章は、我々此の世では助ける事が出來ぬ、未來成佛してと、未來といふ事に重きを措いて居るのであるが、命の終るといふ事が重て無い。此世で念佛のまこと一つを得させて貰ふた一念に、はや此の世で得させて置いて下さるのである。「いそぎ佛になりて云云」よりも、「念佛して」とある此の念佛の一句に氣を附けねばならぬ。「今生にいかにいとをし不便とおもふとも、存知の如く助けがたければ、この慈悲始終なし。しかれば念佛もうすのみぞすえとほりたる大慈悲心にてさふらふべき。」念佛のまこと一つを頂く一念に、はや此の大慈大悲は得させて下されてあつたのである。未來此の大慈大悲の現はれるやうに、はや此の信心の一念にちやんと定めて置いて下されたのである。此の信心の一念が一切衆生を助ける大慈大悲を頂く一念ぢやぞよと御示し下されたか、此の歎異鈔第四章の御教化である。

今迄も度々申したのでありますが、今一度繰返し申しますならば、私が此の春母の病氣に遇ひ國に歸つた時新に氣附かせて頂いたのは何かと言ふに、今申すが如く先に父の病氣の時には「思ふが如く助け遂ぐることありがたし云云」此の御言葉に氣附かせて頂いた事でありましたが、此の度びは平生の時善知識のことばの下に歸命の一念を發得せば、其の時をもて娑婆のをはり臨終と思ふべし。《執持鈔》

此の御言葉に氣附かせて頂く處が多かつた。我々思ふさまに人を哀れみ人を救ふといふ大慈大悲の實現するのは、身滅の後であるが、然う出來る大慈大悲の大もとは、平生の時歸命の一念を發得して、其時に之を頂かして貰ふといふ茲を能く頂かねばならぬ。又度々申す事なれど、其の歸りに丸茂樣の母御の御病床に參り、『歎異鈔』を讀ませて貰ひて、突嗟の間に氣かせて貰うた事は、

その故は彌陀の光明にてらされまいらするゆゑに、一念發起する時金剛の信心をたまはりぬれば、すでに定聚のくらゐに御さめしめたまひて命終すれば、もろ〳〵の煩惱惡障を轉じて無生忍をさとらしめたまふなり。

の御文である。其の時此の文を讀ませて貰うて、此の度び病氣で命終るとも、命の終るは此の度び初めて終るのでは無い、一念發得した其の時には、はや此の世の命は終つて居るのぢやぞといふ此の御教化に氣附かせて頂いた。然うして見ると、今病氣で命終るとも更に心配は無い。此の病室の中が直ぐに本願の船、周圍の有樣が直に本願の海である。所謂

大悲の願船に乘じて光明の廣海に浮びぬれば、至德の風靜に衆禍の波轉ず。《行卷》

である。ちつとも心配する事は無いと、お話し申して來た事であつた。

之も數日前筆執りつゝ氣附かせて貰うた事でありますが、我々は本願の船といふと、船の譬への方にのみ氣を取られ、船の方ばかり思うて、肝腎の大慈大悲の本願の方を、船を形容のように思うて仕舞ふ。然うでは無い船の方が本願の形容である。船の方が本願の形容であるのに、形容の船の方にばかり重きを措く時は、如來の遺る瀨無き、何うかして救うて遣り度いといふ本願の親心の程が頂かれ無い。如來本願の遺

る瀬無き親心が此の私を連れて往つて下さるの故に、大悲の願船であるぞよと、船の方を譬へにお示し下されたのである。

『和讃』に

煩惱にまなこさへられて、　攝取の光明みざれども、
大悲ものうきことなくて　つねに我が身をてらすなり。

我々は常に罪業深重の爲めに眼曇りて居れども、大悲の親心此の者を遣る瀬無く思召し、此の者を救はんとある廣大のみ心故に、此のみ心が船である。其の親心をきく一念に罪重き此の者が、易す〳〵と其の船に浮ばせて貰ふのである。平素船々と申して居れど、其の船が如來の遣る瀬無き本願の船故に、此の罪惡深重の者が輕ろ〳〵と浮ばかせて貰へるといふ、茲を能く頂かねばならぬ。其の「大悲の願船に乘じて光明の廣海に浮びぬれば、至德の風靜に衆禍の波轉ず」である。其の親心を頂く一念に、光明中の身となつて、生死の苦海波立たず、何の心配も無くなつた有樣が、光明の廣海に浮ばせて貰うた味ひである。又『和讃』に

煩惱のなみこそなかりけれ、
大慈の風にまかせたり。

大願海のうちには、
弘誓の船にのりぬれば、

如來廣大の親心の聞こえる一念に、はや此の世から此の尊き身の上にさせて貰ふ。此の一念に「至德の風靜に衆禍の波轉す」である。文類聚鈔』の中に

大悲の願船には清淨の信心を順風とし、無明の闇夜には功德の寶珠を大炬とす。

とお示し下されたも此の譯である。『敎異鈔』の十四章に、彌陀の光明にてらされまいらするゆへに、一念發起する時金剛の信心をたまはりぬれば、すでに定聚のくらゐにおさめしめたまひて命終すれば、云云とあるは、即ち茲をお示し下されたのであります。

而して此の十四章の文は、前いふ第四章と同樣の思召である。平日第四章の思召は、未來淨土に參りて衆生を助けると頂いて居るのであるが、斯く頂いて來ると其の助ける事の出來るは平生の時「念佛していそぎ佛になりて」である。「念佛もうすのみぞ未通りたる大慈悲心にて候べき」である。平生念佛の一念に此の御利益は、ちやんと頂いて仕舞うて居るのである。斯く頂いて今の『涅槃經』の文を拜讀すると實に難有い。――「涅槃經に言はく、善男子大慈大悲を名けて佛性と爲す。」――人を救ひ人を助ける大慈大悲が佛性であるとお示し下されたのである。大慈大悲は佛が衆生を救ふて下さる場合でなければ言はぬ。此の人を救ひ人を助ける大慈大悲を佛性とする。――「何を以ての故に、大慈大悲は常に菩薩に隨ふと……一切衆生は畢に定めて當に大慈大悲を得べし。是の故に說て一切衆生悉有佛性と言ふなり。」――此の大慈大悲は菩薩の身には常に有るが、一切の衆生は皆な其の菩薩の身として頂く事が出來る。一切の衆生は皆な念佛していそぎ佛になりて、大慈大悲心を以て思ふが如く衆生を利益する事が出來る身として頂く事が出來る故に、一切衆生悉有佛性であるとお示し下されたのである。

二

猶ほ續けて『涅槃經』次の文を拜讀すると、

大慈大悲は名けて佛性と爲す。佛性は名けて如來と爲す。大喜大捨を名けて佛性と爲す。何を以ての故に、菩薩摩訶薩は若し二十五有に能はず、則ち阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はず。諸の衆生畢に當に得べきを以ての故に、是の故に說て一切衆生悉有佛性と言へるなり。

此の文を讀むと、佛性は如來の大喜大捨が佛性である。夫れは如來と成りての上の事である。菩薩摩訶薩でも二十五有に至らなければ之を得る事は出來ぬ。況んや我々迷ひの世界に於て到底此の大慈大悲を得る事は出來ぬのである。夫れが此の度びお慈悲を頂く一つて、此の廣大な德益が得させて貰へる、夫れ故に一切衆生悉有佛性であるとお說き下されたのである。又續けて、

大喜大捨は即ち是れ佛性なり。佛性は即ち是れ如來なり。佛性をば大信心と名く。何を以ての故に、信心を以ての故に菩薩摩訶薩は則ち能く檀波羅密乃至般若波羅密を具足せり。一切衆生は畢に定めて當に大信心を得べきを以ての故に、是の故に一切衆生悉有佛性と言へるなり。

大信心が佛性である、一切衆生是の信心を得る事が出來る故に、一切衆生悉有佛性であるとお說き下されたのである。我々聖道門の修行では心の中に少しばかりの光が顯はれたのを佛性などゝ言うて居るなれども、淨土門に於ては他の事は無い、大信心が佛性である。信心を得れば菩薩摩訶薩の檀波羅密、乃至般若波羅密、其の他一切の功德が、此の信心に具つて居る。此の故に信心を得る事が一切衆生悉有佛性である。一切の衆生は信の一念に、未來淨土に參りて一切の衆生を濟度する之等無量の德力を得るのぢやとお示し下されたのである。話が前後しますが『諸經和讃』の中には、

如來すなはち涅槃なり、　涅槃を佛性となづけたり、
凡地にしてはさとられず、　安養にいたりて證すべし。

其の佛性は何時現はれるかといふに、彌々極樂に參りて佛に成つた時が佛性の現はるゝ時である。夫れ迄は此の世に居る間は佛性の現はるゝ味ひはさとられぬ。淨土に參りて夫が顯はれ、極樂に參りて初めて夫れが實行させて貰へるのであるが、其の廣大の力はいつ得るかといふに、信心を頂く一念に其の力は得させて貰ふのである。南無阿彌陀佛を得させて貰ふ時に、其の衆生濟度の力は得るのである。又

信心よろこぶそのひとを、　如來とひとしとときたまふ、
大信心は佛性なり、　佛性すなはち如來なり。

信心喜ぶ者を佛は如來と等しいとお說き下されてある。如來と等しき如き廣大の身の上として頂き、生々世々の父母兄弟一緒に淨土參りが出來る如き廣大の仕合はせは何時得るかといふに、別々に得るのて無い、信心の一念に、一度に得させて下さるのである。

今日は大層文を讀みますが、之等の文が親鸞聖人が唯仰せられるのて無い。『信卷』今の『涅槃經』の文の直ぐあとにお引きなされてある『華嚴經』の文には、

華嚴經に言はく、此の法を聞いて信心歡喜して疑ひ無き者は、速に無上道を成らむ。諸の如來と等しとなり。

如來のお慈悲を頂き疑ひなく歡ぶ者は、速に無上道を成る。茲になると『華嚴經』の文なれども、大經第十八願成就の文と

全く同様である。「あらゆる衆生其の名號を聞きて信心歡喜乃至一念せん。至心に廻向したまへり。彼の國に生れんと願ずれば即ち往生を得」といふ文と全く同意義である。如來本願の法を聞き、信心歡喜して疑ひ無き者、至心信樂已を忘れて喜ぶ者は、「速に無上道を成らむ」必ず佛にして下される。斯くなる上は「諸の如來と等しとなり」――信心喜ぶ者は此の世に居ながら既に如來と等しき身分ぢやぞとお示し下されたのである。又『和讃』には、

他力の信心うるひとを、うやまひおほきによろこべば、
すなはちわが親友ぞと、教主世尊はほめたまふ。

此の和讃なども一寸意味が取り難い。他力の信心得る人を、即ち吾が親友ぞと、教主世尊はほめ給ふてある。他力の信心うる人は、其の人が如來の慈悲を頂き敬ひ慶ぶ故に、其の人を吾が親友ぞとほめ給ふ。「信心よろこぶその人を、如來とひとしとときたまふ」と同様である。又先程申した「如來すなはち涅槃なり」の和讃の御左訓で言ふと、

如來トマフスハスナハチネハントフスミコトナリ。ネハントマフスハ、スナハチコトノホフシントマフス佛性ナリ。シルベシ。コノボムブコノセカイニシテサトラズ候ヘハ、他力ヲタノミマイラセテ、アンラクシヤウトニシテサトル。

佛性を悟らせて貰ふは、安樂淨土に往生した時悟らせと貰ふのである。此の凡夫が此の世で他力の信心を頂けば、未來必ず安樂淨土に往生して、此の廣大の悟の境界を開かせて貰ふ。故に「信心喜ぶその人を、如來と等しと說きたまふ」「吾が親友ぞとほめたまふ」「大信心は佛性なり」である。然らば此の身に此の佛性があるのかといふに、然うで無い。此の身の上は我等はいつ迄も惡業の凡夫である。惱み苦しみの此のお互に、佛性などが有るもので無い。夫れが如來の遣る瀨無き本願のお慈悲一つが屆いて下さる一念に、此の廣大の御利益を得、此の惡業の仕方の無い者が極樂淨土に往生する。一切の衆生に佛性が有るといふも、此の如來廻向の御信心を頂く事が佛性であるとお示し下されたのである。

猶ほ少し續けて『涅槃經』の文を拜讀すると、

大信心は即ち是れ佛性なり。佛性は即ち是れ如來なり。佛性をば一子地と名く、何を以ての故に、一子地の因緣を以ての故に菩薩は則ち一切衆生に於て平等心を得たり。一切衆生は畢に定めて當に一子地を得べきが故に、是の故に一切衆生悉有佛性と言へるなり。一子地は即ち是れ佛性なり。佛性は即ち是れ如來なり。

今迄と同様のお示である。此の如來廣大のお慈悲を喜ぶと、一子地の果報を得る身として頂いたのである。『和讃』で言ふならば

平等心をうるときを、一子地となづけたり、
一子地は佛性なり、安養にいたりてさとるべし。

此の平等心の御左訓に

ホフシンノ心ヲウルトキナリ。

又一子地の御左訓には、

三カイノシユシヤウヲワカヒトリコトオモフコトヲウルヲヰチシチトイフナリ。

一子地と云ふは、三界の衆生を眞に可哀いと知らせて貰ひ、

誰も彼も我が一人子の如く、悉く可哀いと思へるやうになつた時を一子地といふ。此の火宅無常の世界に於て、此の罪深きお互は親も子も乃至兄弟朋友も救ふ事が出來ぬ。其の者が如來廻向の廣大の惠み一つを頂くにより、此の我が命終畢るに於ては、即ち「一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり、いづれも〳〵この順次生に佛になりてたすけ候べきなり」――有りと有らゆる衆生、即ち三界の衆生を一人子の如く思ひ、之を救ふ事の出來る大悲平等の力を下さる。此の廣大のお力を頂くの故、一切衆生悉有佛性であるとお示し下されたのである。

斯く話する間に、段々『歎異鈔』の思召を喜ばせて頂く事が出來る。即ち四章より五章に移りて、

親鸞は父母孝養のためとて、一遍にても念佛まうしたることいまださふらはず。そのゆへは一切の有情は……たすけさふらふべきなり。わがちからにてはげむ善にてもさふらはゞこそ、念佛を廻向して父母をもたすけさふらはめ。たゞ自力をすてゝ急き淨土のさとりをひらきなば、六道四生のあひだ、何れの業苦にしづめりとも、神通方便をもてまづ有緣を度すべもなり云云。

の仰せが又茲である。人の力で及ぶ事なら、我々親孝行は仕度い。「吾が力にて勵む善にても候はゞこそ、念佛を廻向して父母をも助け候はめ。」――念佛稱へて親が救へるなら、我々が稱へて親が救へる念佛なら、如何なる道をも取りて見やう。けれども我々の力は間に合はぬ。此の世に居る間は自分の力は一分一厘も及ばぬ身である。一聲稱へる念佛と雖も、是れこそ眞に惠みばかり、我が方よりは設へ親の爲とは言へ一分一厘も働きて見やうの無き身の上である。夫程の淺間しき私に、親より回向の南無阿彌陀佛の六字の惠み、如來より下さる大信心は、此の世の父母兄弟のみならず、生々世々の父母兄弟を一子の如く救へる廣大の身の上として下さる。之を平等心と言ひ、一子地といふ。此の平等心一子地は、極樂に往きて現はれるのぢやとお示し下されたのである。

今日は色々の事を申しますが、私は能く大菩提心といふ事を話す。此大菩提心の如きも、普通ならば自分が佛に成り度いと求め、一切衆生を救ひ度いと願ふ心である。所謂上求菩提下化衆生が聖道門自力の菩提心である。けれども我々そのやうな事出來ぬ、そのような平等大悲は思ひも及ばれぬ。『和讃』には、

自力聖道の菩提心、こゝろもことばもおよばれず、
常沒流轉の凡愚は、いかで發起せしむべき。
三垣河沙の諸佛の、出世のみもとにありしとき。
大菩提心おこせども、自力かなはで流轉せり。

自力聖道の菩提心は我々には駄目である。三垣河沙の諸佛の、出世のみ許に在りし時、大菩提心起せども、自力かなはで駄目であつた。さすれば普通より言ふならば、法然聖人が『選擇集』にお示し下さる如く、我々は菩提心すらも及ばぬ者である。唯ひたすらに一向專念無量壽佛と、南無阿彌陀佛のお慈悲一つを頂くばかりである。其處で親鸞聖人は、其の南無

阿彌陀佛を頂く廣大の信心は、此の度びは掌を反して、之が淨土の大菩提心であるとお示し下さる。『和讃』に

淨土の大菩提心は、　願作佛心をすゝめしむ、
すなはち願作佛心を、　度衆生心となつけたり。

私共自分で佛に作り度い、淨土に往生し度いといふ願作佛心や、人を救ひ度いなどゝいふ度衆生心は起らぬ。自分の身を成り立て度い、自分の身が長生き仕度いといふ心ばかりで、早く極樂に參り佛に作り度い、などいふ心は先きに立たぬ。信仰に氣の附く迄は、唯自分の苦を取り度い、早く樂になり度いといふ心ばかりで、此の心が信仰を聞くもとになつて居るのだから、此の心が菩提心や求道心などゝは言へぬ。求道とは何かといふに、我々人間が道を求むる心で無く、佛の廣大なるみ親が此の我々衆生を助ける爲めに、親が願を起して我々を救ひ度いと種々に御苦勞して下さる、其の佛の願作佛心である。每々言う事でありますが、私が十年前此の學舍を命名する時、何から此の求道といふ文字を選び出したかといふに、法藏菩薩が世自在王佛のみ前で法を聞かれた時の『大經』の御言葉である。曰く、

爾の時世自在王佛、其の高明志願の深廣なるを知しめして、即ち法藏比丘の爲めに、而も經を說て言はく、譬へば大海を一人升量せんに、刼數を經歷して尙ほ底を窮めて其の妙寶を得べきが如し。人心を至し、精進にして道を求めて止まざること有れば、會當に冠果すべし。何の願か得ざらんと。云云。

此の世自在王佛の仰せを聞き、法藏菩薩が此の私はじめ一同の爲め、佛に成りて救うて遣り度いとの願作佛心をお起し下された。此の若不生者不取正覺の本願を起し、佛に成るとの大悲心が佛の願作佛心である。夫れが佛御自身の爲めて無い。此の罪は私を佛になさずば我も正覺は取るまい、佛とは名乘るまいとの本願なれば、即ち如來の願作佛心を度衆生心といふ。此の遣る瀨無き如來の本願成就のお力が、とうど私如き菩提心も起さず、自分の身の事ばかり思ふ淺間しき心に屆いて下され、今迄淨土に往かうの、人を救はうのといふ思ひは毛頭無つた私の心が、方角が逆さまになりてやれ有難やと喜びの心が起る、之が佛の願作佛心度衆生心が屆いて下され、極樂に參らせて貰ふ思ひである。其の參らせて貰ふ思ひが、はや既に淨土に往きて一切衆生を救はせて貰ふ度衆生心願作佛心である。其處で『信卷』下卷の御言葉には、

眞實の信心は即ち是れ金剛心、金剛心は即ち是れ願作佛心、願作佛心は即ち是れ度衆生心、度衆生心は即ち是れ衆生を攝取して安樂淨土に生ぜしむるの心なり。是の心即ち是れ大菩提心、是の心即ち是れ大慈悲心なり。

斯のやうな衆生を攝取して安樂淨土に生ぜしむるの心とはいふやうな有難き度衆生心迄得させて頂くのである。

以上は御文に出て居る上からお話ししたのでありますが、此間も先き程言ふ『歎異鈔』の「そのゆゑは彌陀の光明に……一念發起する時金剛の信心をたまはりぬれば、すでに定聚のくらゐにおさめしめたまひて命終すれば、もろ〳〵の煩惱惡障を轉じて無生忍をさとらしめたまふなり。」の御文、此の信の一念に命終して、此世からはや既に無生忍を得るといふ

此の御敎化に就き、或る方が『勢至菩薩和讃』、に

われもと因地にありしとき、念佛の心をもちてこそ、
無生忍にはいりしかば、　いまこの娑婆界にして、
念佛のひとを攝取して、　淨土に歸せしむるなり、
大勢至菩薩の、　大恩ふかく報ずべし。

此の和讃に無生忍といふお言葉がある。此の事は何うかとお尋ね下された。此の事に就き今繰返し申しますが、親鸞聖人此の無生忍の御左訓には、

フタイノクラキトマフスナリ。カナラズホトケニナルベキミトナルナリ。

と斯く仰せられてある。無生忍とは此の世に居ながら佛に成る可き身となり、未來衆生濟度の出來る身となる事をいふのである。今此の『和讃』は聖人『首楞嚴經』により御製作なされたのであるが、勢至菩薩がまだ佛と成り給はぬ前、まだ凡夫でましました其の時に、「念佛の心をもちてこそ、無生忍には入りしかば」――南無阿彌陀佛を頂き南無阿彌陀佛を念じ、其の念佛の力で無生忍に入り、悟りに往かれたといふのである。之は『首楞嚴經』に勢至菩薩の圓通を說く處に斯く說かれてあるのであるが、其の因地の勢至菩薩が、念佛一つで無生忍に入り淨土に往生して一切衆生を御化益下されたのである。即ち「念佛していそぎ佛になりて、大慈大悲心をもておもふが如く衆生を利益す」る事になるのである。夫れ故其の勢至菩薩が再び此の界に現はれ、「いまこの娑婆界にして、念佛のひとを攝取して、淨土に歸せしむるなり」である。先きの「願作佛心は即ち是れ度衆生心、度衆生心は即ち是れ衆生を攝取して安樂淨土に生ぜしむるの心なり」の御敎化とひたと合ふのであります。

話が色々になりますが、此の『勢至讃』は聖人が法然聖人の本地を仰せられたものである。即ち其の勢至菩薩が再び此の世に顯はれ、念佛の衆生を攝取して、淨土に歸せしめて下さるが、法然聖人一代の御化導とお喜びなされたのである。斯く勢至菩薩が再び法然聖人と現はれ、此の土のお互ひを濟度下さるは何がもとかといふに、「念佛の心をもちてこそ、無生忍には入りしかば」――其の因地の時念佛の一念に頂かれた度衆生心が、彌々極樂に往生なされて事實に現はれたものが法然聖人一代の化導である。勿體無けれど『和讃』に、

安樂淨土にいたるひと、　五濁惡世にかへりては、
釋迦牟尼佛のごとくにて、　利益有情はきはもなし。

法然聖人が斯くの如き一代の御敎化も、釋尊が八十隨形好を現じて衆生濟度をして下された事も、勿體無き事なれど此の我々が頂く信心の一つに其のお力は下されてあるの故に、即ち此の信心は願作佛心である、度衆生心である。「度衆生心は即ち是れ衆生を攝取して安樂淨土に生ぜしむるの心なり。」「一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり。いづれも〳〵此の順次生に佛になりて助け候べきなり。」此の信心を頂く上は未來淨土に往生して法然聖人の如く、釋尊の如く、衆生濟度をさせて頂く事が出來るのである。此の心即ち大菩提心である、大慈悲心である。此の廣大の心でなければ「すゑ通りたる大慈悲心」とはお示し下さらぬ。又先程いふ『信卷』下卷の御文には續けて、

是の心即ち是れ無量光明慧に由り生ずるが故に、願海平等なるが故に發心等しき。發心等しきが故に道等し。道等しきが故に大慈悲等し。大慈悲は即ち是れ佛道の正因なるが故に。

是の心は即ち是れ佛の無量光明慧の廣大惠みによりて頂かれるのである。先程いふ平等心といふ事も茲にある。上下の區別無く現はれるが、如來の廣大な平等の大悲心である。我々はお慈悲に氣の附く一念、此の廣大な願海平等の悟りの心を得させて貰ふ。故に頂いた此のお慈悲心即ち平等心である。此の廣大な佛の大悲心を、我々凡夫が得させて貰ふのである。「願海平等なるが故に云云」――茲はもう何とも口には言うに言はれぬ。『和讃』に

彌陀智願の廣海に、　凡夫善惡の心水も、
歸入しぬればすなはちに、　大悲心とぞ轉ずなる。
彌陀智願の海水に、　他力の信水いりぬれば、
眞實報土のならひにて、　煩惱心提一味なり。

もう茲は大慈大悲極まり無き本願の海の中に、我等が信心を得させて貰ふ極所である。私は緣ありて此の間此の和讃の聖人の眞筆を拜見した。夫には「他力の信水」を「我等が信水」とお記しなされてあつた。何れにしても同じ事である。此の如來より頂く我等が信心の水と、如來本願の願海の水とが別々で無い。願海平等の慈悲の水が、即ち我等の心に頂いた他力信心の水である。故に「願海平等なるが故に發心等し。發心等しきが故に道等し」である。勿體なけれども佛が一切衆生を救うて下さると同樣なる、我等が一切衆生を助ける發心、大慈悲心迄も此の信の一念に下さるのである。此の發心等しきが故に悟りも佛の悟りと同樣の悟りを得させて下さるのである。此の大慈悲心が即ち佛道の正因であるとのお示しである。

以上は『信卷』下の卷にある御文であるが、聖人は更に續けて『論註』の文をお引きなされ、

論の註に曰く、彼の安樂淨土に生ぜんと願ずる者は、要ず無上菩提心を發する也とのたまへり。

外の事は無い。此の廣大なる惠みを喜ぶ時に、はや此の廣大なる淨土の無上菩提心は下されてあるのである。又續けて、

又云はく、是心作佛とは、言ふこゝろは心能く作佛する也。是心作佛といふ事を、是の我々の心が直ぐ佛に作る事と思ふと大違ひである。我々の心は惡業の塊りである。其の惡業の胸の中へ、如來より御廻向の廣大慈悲心一つ、此の廣大御廻向の親心一つにより、此の惡業の身を佛に作る可き身とさせて下さるのである。又續けて

是心是佛とは、心の外に佛ましまさずと也。譬へば火木より出でゝ火木を離るゝことを得ず、木を離れざるを以ての故に、即ち能く木を燒く。木火の爲めに燒かれて即ち火と爲るが如しとのたまへり。

木て火をたくと、火の氣無き薪なれども、其火が木に着くと、其の木が燃えて灰になる。夫れと同樣我々の胸の中は煩惱の薪ばかり、火の氣といふては更に無い。一切衆生悉有佛性といふ事は、初めより言ふ如く、決して我々の心に火があるといふ事では無い。我々の心は冷かなる薪ばかり、其の煩惱の薪の中に、大慈大悲の如來の、此の私を見捨てぬといふ、御念

力の塊りの心の火が移る一念に、八萬四千の煩惱の薪が燃えて皆な火となる。我々の心は此の煩惱の薪ぢやぞ、此の親の我々を救はんといふ遣る瀨無き心が火てあるぞ。其の火が我この心に移る一念に、此の惡業煩惱の心の外に、別に新に信々の種が這入るて無い。此の煩惱の薪に火の移るなり、煩惱の薪を燒き盡して、薪か火となるのぢやとお示し下されたのである。『和讃』には、

無碍光の利益より、　威德廣大の信をえて
かならず煩惱のこほりとけ、すなはち菩提のみづとなる。

淨土の大菩提心は此の煩惱の外に來るのでない。此の煩惱の罪深きを哀れと見て下さる佛のお心、此の心が屆いて下さる一念に惡業煩惱の氷融けて、淨土の大菩提心の水と轉じ變へらるゝのである。冷かなるかさ〳〵とした、手の着けられぬ煩惱惡業の我等が心の薪に、たつた一つなれども、其の煩惱惡業が哀れぢやといふ、其の遣る瀨無き如來の御念力、あなたのまこと心が、此の罪深き私の心に屆いて下さる一念に、あゝ如何にも遣る瀨無き廣大のお慈悲であつたと、火の燃え移るは、薪から出る火ぢやなけれども、薪を燒く向ふの廣大の火の力故に、悉く此方の煩惱惡業の薪を燒き盡して、遣る瀨無き如來廻向の願作佛心、度衆生心、大慈悲心と、焰々と盛に燃える火ぢやぞよとお知らせ下さるのである。

四

私は此頃色々のものを見せて貰ふ。之れは始終茲にお出下さる竹原君が、親鸞聖人の直筆の寫しがあるとて見せて下され、私が夫を寫して來たのであるが、夫れは私の常に言ふ『涅槃經』の御文である。既に皆樣はよく御承知の如く、『信卷』に御引用なされてある『涅槃經』阿闍世王入信の處に、諸の佛弟子が偈を以て讃歎した文がある。其の中の一節である。之は私の『懺悔錄』の序文の中にも引いて置いたのでありますが、曰く

如來は一切の爲めに、常に慈父母と作り給へり。當に知るべし、諸の衆生は、皆是れ如來の子なり。世尊大慈悲衆の爲めに苦行を修したまふこと、人の鬼魅に著せられて、狂亂所爲多きが如し。

實に有難き御文である。豫て言ふ如く私は親鸞聖人が度々書いて喜ばれた文に違はぬと、七年前父に別れた時、父の遺愛の『假名聖經』の帙の裏に父が此の文を書いて置いたを發見し、爾來常にそう思うて喜ばせ貰うて居た。親が自分の子の爲めに種々心配して狂氣になり奔り廻る。夫れと同樣に佛は此の私を助ける爲めに、あなたの大悲の胸を痛めて今日迄待ち受けて下さる。其の佛の遣る願無き思ひは、人の親の鬼魅に著せられて、狂亂所爲多きが如しといふのである。私は何うも之は一通りならざる文と其時知らせて貰ひ、聖人が分けて喜ばれた文に違はぬと、以前より思うて居た。處が此の前も言ふ如く先般京都に寄りて、西本願寺の集覽會で、聖人が自筆の名號の下に此の文を御記しなされてあるを發見した。又今度竹原さんに見せて頂いたのは、聖人が御弟子の善蓮に種々有難い文を集めて書いてお遣りなされた一卷の直筆の聖敎の寫してある。惜しい事には其の原本が何處に在るか分らぬ。

寫しなれども籠字で拔いたのであるから、御直筆其の儘に出來て居る。原本の寫しが下間家に在つたのを、見せて貰らひ更に又寫したものであるそうである。此の中に今の文が引かれてあるのである。此の文が實に有難いので、如來の此お心が、如來の願作佛心度衆生心のもとである。如來大悲の遣る瀬無き一切衆生を一人子と思召して下さる。「如來は一切の爲めに常に慈父母と作りたまへり、當に知る可し、諸の衆生は……狂亂所爲多きがごとし」――如來は實に我が爲めの慈父母ぢやぞと呼んで下さるのである。此の罪深き者に、其の親の親心を知らせんと、五刼永刼の御苦勞を仕て下さるのである。『歎異鈔』に

彌陀の五刼思惟の願を案ずるに、ひとへに親鸞一人がためなりけり。されはそこばくの業をもちける身にてありけるを、助けんと御はからひたちける本願の忝けなさよ。

と、此の一つである、此の外に頂く處は無い。我々は煩惱が多い、罪が深いなどゝ彼れ是れ自分勝手に苦しんで居るのであるが、佛は豫て其處を能く知し召して、其の「そくばくの業を持ちける者を」と言つて下さるのである。又

佛かねて知し召して、煩惱具足の凡夫と仰せられたる事なれば、他力の悲願はかくのごときの我等が爲めなりけりと知られて、いよ〳〵たのもしく覺ゆるなり。

「煩惱具足の凡夫を」と言つて下さるのである。何れの行も及ばぬ其者をと言つて下さるのである。此の遣る瀬無き如來の思召の屆く時、淨土の大菩提心を頂く。其の時が如來の私を救ふとの度衆生心を頂いた時である。之が一子地の心である。願海平等の心である。此の如來の度衆生心、平等心を頂けば、此の私が一切衆生を救ふ大慈大悲、生々世々の父母兄弟を救ふ平等の大悲に入らせて貰ふたのである。十方衆生を一人子の如く思ふ一子地に入らせて貰うたのである。大聖釋尊の如く一切衆生を濟度する力迄、此の時に頂くのである。乍更其の力を頂くは此の一念に頂くのであるが、夫は凡地にしてはさとられぬ。彌々此の廣大の御力の現はれて下さるは、此の世の命畢り、眼を閉ぢた時である。更りながら命畢り、眼を塞ぐは、塞ぐ時塞ぐのでは無い。遣る瀬無き親心の火が私の惡業の薪に燃え附いて下さる其の一念に「善智識の言葉の下に歸命の一念を發得せば、其の時をもて娑婆の畢り臨終と思ふべし」である。此の御慈悲の屆いて下さる一念に、此の肉體は此の世にありながら、長の迷ひの命の根切をさせて貰うたのである。

『正信偈』の中に、

善導獨り佛の正意を明せり。定散と逆惡とを矜哀して、光明名號因緣を顯はす。　本願の大智海に開入すれば、行者正しく金剛心を受く。　慶喜一念相應の後ち、

韋提と等しく三忍獲、即ち法性の常樂を證せしむといへり。遣る瀬無き如來本願の思召は、定散自力の善人も、五逆十惡の惡人も區別が無い。皆な一味平等に此者を哀れみて下され、「定散と逆惡とを矜哀して、光明名號因緣を顯はす」である。南無阿彌陀佛の名號の父、八萬四千の光明の母、此の遣る瀬無き佛の大慈悲心より光明名號の大因緣を顯はして、長々此の者を待ちかねて居て下さる――此の廣大の御親心――世尊

大慈悲衆の爲めに苦行を修し給ふこと、人の鬼魅に著せられて狂亂所爲多き如し。――此の廣大の御親心、御苦勞に私共一念氣の附く時に、本願の大智海に入り込ませて貰ふ。其の一念に「行者正しく金剛心を受く」である。其の金剛心は即ち願作佛心、度衆生心なる事先き程の文の通りである。「慶喜一念相應の後ち、韋提と等しく云云」――其の罪深き者を可哀相と呼び懸け下さる如來廣大本願の仰せが、此の私の胸に響くなり、あゝ此の淺間しき者を哀みまします廣大の慈悲にてましますかと一念頂いたが、慶喜一念相應である。其の一念に罪深き奴が、罪が無くなるのでは無い。今迄夫程罪深いとは知らずに居たが、如何にも罪深き地獄は一定住み家の身であつた、吾が身は現に是れ罪惡生死の凡夫であつたと氣附かして貰ふ。其氣附きし一念に韋提と等しく三忍を得させて頂く。『歎異鈔』第十四章の「すでに一念發起する時金剛の信心をたまはりぬれば……無生忍をさとらしめたまうなり」と同樣である。『觀經』には韋提希が無生忍を得る處に、廓然大悟、得生無忍とある。廓然大悟と言へばとて、からりと心の開く方を先きに思ふのて無い。今迄長々何んのかんのと思ふて來たが、何思うて居たのであつたか。此惡い仕樣の無い奴なればこそ此の者を救ふとある御慈悲てないかと、我が心の善く無い事を知れば知る程、彌々惡みの程を喜ばせて貰うが、喜、悟、信の三忍を得、無生忍を得させて頂いた有樣てあります。今日の講話は甚だ前後混雜致し、意味の取り難き事ならんと思ひます。『歎異鈔』十四章に宣はく

この悲願ましまさずばかゝるあさましき罪人、いかてか生死を解脫すべきとおもひて、一生のあひだ申すところの念佛は、みなことごとく如來大悲の恩を報じ、德を謝すとおもふべきなり。云云。

『和讃』に

如來大悲の恩德は　身を粉にしても報ずべし。
師主智識の恩德も、　骨をくだきても謝すべし。

南無阿彌陀佛。

《六月十二日》

本誌毎月遲刊勝ちに相成り申譯無く候。今回期日回復の爲め、七月號は休刊と致し、本號を以て八月號と相改め候に付左樣御承知被下度く、猶ほ本號は期日に切迫して水災の禍を受け、原稿到着致さず甚だ疎雜に相成り候へ共、他日其の補ひは致し可申、御寬恕を願上候　匆々

求道發行所

聖傳

ジャータカ釋尊傳

久遠刼の昔（前號に續く）

大地の震動に人々怖れおのゝき、恰かも娑羅樹が天還ふく大風に惱まさるゝ如く、此處彼處に氣を失ひて打倒れぬ。水瓶を始め總ての器物は陶器師の車に於ける瓶の如く廻りて衝突し片々に碎けぬ。

群集驚きの餘り世尊に近づきて問ひ奉りぬ。「師よ、此騷擾は龍神のなせる業にや、或は妖怪等の爲せるにや、人々心安からざれば、此前表の善か惡かを告げたまへかし、」と。師は此言葉を聞きて曰く、「恐るゝ勿れ又煩ふ事勿れ、此は汝等に災する處なし、汝等見ざりしや、我は今日しも賢者スメダに豫言したりしを、正しく彼は佛たらんと、今や彼は佛行を觀じ、自在無碍に其行を得て、深く修せん決定堅し、其信力によりて全世界は同音に振ひたりしなり」と。

佛に隨ふ人々は
此とゞろきにおのゝきて
心も空にたをれたり、
憂のあまり御佛に
集ひて問ひぬ、此しるし、
世のため善か惡なるか

菩薩其座より立ちし時、大千世界の天使等は花輪香物等を捧げ讃歎しけるには、「貴き比丘スメダよ、此日汝はジバンカラ佛の御足の下に大なる決心を爲しぬ。汝は必定障礙なく佛陀たるべし、恐れ迷ふ事なかれ、些の病も汝の身を侵さゞるべし、疾く速に佛道を成じて優れたる佛陀となるべし」等、さまゞゝに祝福して彼等の都に歸りぬ。

時に菩薩は天使等の恭敬讃仰を受けて益々努力精進せん心深し、曰く、十滿行を行じつくして四アサンキーヤス十萬シイクルの曉我は佛陀となるべし、とて空に立ちヒマヴアンナに歸り行きぬ。

スメダ其座を立ちし時、
天使も人も天と地の
花輪を投げて散じつゝ
共に讃仰したるには、
汝大願立てしより、
願の如くかなふべく
總ての危險遠ざかり、
萬のやまひ消えうせて
汝は無碍に速に
佛のすぐれし智慧を得ん。
時來るれば花さきて
樹の實みのるが如くなり、
汝も佛智花さきて
なべての佛、十善を
成じたまひし如くせん。

敎へて心安んぜよ。
大聖ジバンカラ佛は
信ぜよ人等怖るゝな
此震動は此日しも、
賢者スメダは佛たると
我豫言せる事ぞかし。
かくてスメダは佛行を
觀じつくして身にしめて
つとめん心いとかたし
大千世界人天は
信に感じて震ふなり。

人々佛陀の御言葉を聞き歡喜して忽ち花束香物等をもち、ラムマの市を離れ菩薩の御許に行きぬ。もたらせる花束及び他の贈物を捧げ、彼等はスメダを恭しく禮し、再びラムマの市に歸り來りぬ。菩薩決定いよ〳〵堅く其座より立ち上りぬ。

佛のみことばきゝし時、
人の心は忽ちに
平和になりぬ、嬉しさに
彼等は花輪香物を
捧げんがため、スメダをば
訪ひて再び禮しけり。
佛の滿行身にしめて
堅き心は石のごと
ジバカラ佛禮しつゝ
彼は座よりぞ立ちにける。

貴き人よ、佛道を
成りて大智の玉座をば
輝かすべし、汝亦
光明かゞやく時ぞ來ん、
總ての佛が優れたる
法を贈むる如くにて。
貴き人よ、勝れたる
法をたてかし、一月の
まなかの月の圓にて
淸らに澄める樣のごと
汝も功德みち〳〵て
十方世界をてらしてよ。
雲霧のぞきし日輪は
强くも光放つなり、
汝も人を救ひつゝ
威神の光かゞやかせ。
諸川の海に歸するごと
天使も人も皆共に
汝に歸命なさしめよ。
菩薩これらの讃美うけ
十の佛道ふみしめて
修すべく森へ入りにけり。

ラムマの市民等は市に歸りて佛陀を始め奉り、數多の衆僧を請じ法の席を開きぬ。師は彼等に法を說き三歸依を授け信仰に就きて諸の行を敎へ、あまねく敎化してラムマの市を

去りたまひぬ。かくて佛陀は諸の功德の寶を施しつ、無限の衆生を濟度したまへり。遂に其壽終りし時寂靜無爲の大涅槃界に入りたまひぬ。

ラムマの市民御佛を
御弟子と共に招じけり。
ジバンカラ佛歸命して
或は五戒授けられ、
或は十戒うけしめき、
或は僧となしたまひ、
四つのかがやく果を得しむ、
或は智慧の雙なき、
寶を與へ、或はまた、
八つの聖たる才あたふ。
かくて大聖群生を
戒め敎へたまひしに
慈悲のみのりは末とほく
世に廣くこそ傳はりぬ。
御肩はひろく廣長の
舌相無碍に法ときて
無數の人を導びきつ
未來の苦惱のがれしむ。
救の時の熟すれば
四百千里のへだゝりも
刹那に行きて其人を
迷よりとく呼びさます、

眞實の智慧の御力は
實にもしられぬ强さかな。
此御佛が金口をば
始めて開きたりし時、
千萬の人信をえぬ。
第二には又百千の
人々菩提求めたり。
第三の時天使等の
國にあそびて法を說き
七百萬を度したまふ。
佛に三たびの會座ありき
始めの時は億萬の人集ひたり。
第二には佛ナーラタキューダにて
幽居したまふ時なりき、
一千萬の人垢なき、
羅漢等集ひ來りけり。
第三の時大聖は
スダッサナなる岩山に
おはして九百千萬の
人もて圍繞せられたり。
其時我は苦行者の
まげる髮して空中を
步み來りつ、佛を見て
五つの勝れし力得ぬ。
此時算數及ばざる

人々信を得たりけり。
かくて佛のきよらけき、
みのりはひろくひろまりつ、
いとも盛に名も高く
ジバラカラ佛恭敬しぬ。
四百千餘の聖者等は
六つの力をさづけられ、
神通自在にめくまれぬ。
三世の智者よ、ジバンカラ
此御佛のおはす世に
逢はで過ぎにし人あはれ、
信を得られず、優れたる
智慧も受けえで流轉せん、
悲しきことの極なり。
佛のをしへ十方に
輝きわたり、罪もなく、
迷はなれし聖者らに
よりて花さき盛なり。
ジバンカラ佛の御國をば
ラムヅアチとこそよびにけれ、
カーチャスメダは父の御名、
スメダは母の御名ぞかし、
スタガラ、チッサは主なる弟子
サーガタ、は佛の僕なり。
ナンダ、スナンダ尼の弟子

菩提樹の名はピパリなり。
八十キュビット丈たかき、
佛の姿はヂォダーの
松か、花さきみだれたる
娑羅樹の如く卓越す、
此御佛の壽命こそ、
百千年といはれたれ。
世におはす間は斷へ間なく、
人をめぐみて濟度せん、
眞如の光いやてらし
多くの衆生導びきて、
大火の如く燃えわたり、
やがて滅をば示されき。
この御力や此榮
みあしの輪がだ今ははや、
無爲の都へかへりにき。
無常を示す御慈悲かな。

ジバンカラ佛の次に一アサンキーヤスへてコンダンナ佛現はれぬ。彼佛亦三度の會座ましましき。最初には、億萬の人集まり、第二には一億の人あつまりぬ。此時菩薩はヴインタヴイシなる國王なりき。一日僧等を請じて法座を開きぬ、集ひし人々其數億萬なりき。時に佛陀は菩薩なる國王に豫言して曰く、汝はやがて佛とならんとて懇に說法したまへり。彼は佛の御敎を聞き忽ち發心して、王位を拋ち僧となり三寶に事へぬ。彼は六の勝れし智慧を得、過なく、よく禪定を修し

たり。かくて命終してブラマ天に再生したりき。コンタンナ佛の市はラムヴアチにて、カーチヤ、スナンダは父、スジアータは母、バータ、スバータは其主なる弟子、アヌラッタは其僕、チツサ、ウバチツサは尼の弟子、菩提樹の名はサラカリイアニなりき。彼佛の身長は八丈八尺壽命は百千年なりき。

一アサンキーヤスの後毎に四の佛陀相次ぎて生じたまへり。マンガラ、スマナ、レヴハタメピタなりき。

マンガラ佛亦三度の會座ありき。第一には億萬の人、第二には千萬の人、第三には九百萬の大衆集まりぬ。

時に佛の弟なる王子アナンダは九百萬の會座に列し、佛の法を聞きたりき、佛は種々の敎もて巧に長廣の舌を動かしたまひしかば、たちどころにアナンダ及其一屬共に寂靜の智を得、阿羅漢果を證しけり。佛彼等の前世に植えたりし德本の大なるを認めたまひ、佛の神通により、彼等は共に衣鉢を得べき功德あるをもしろしめしたりしかば、直ちに右手を差し出したまひ「來れ僧等よ」と呼びたまへり。

時に彼等は果せるかな、其神通により、衣鉢を得、六十年も經たらん長老等の如く作法そなはりて、立ちぬ。

此佛には他の佛と異れる隨相ましまし、他の佛は各八十キュビットの光身をめぐりて四方をてらしたまふに、此佛のみは、大千世界木土山海、器物に至るまで、あらゆるもの金粉もてつゝまれし如く、光に滿たしめたまひ、長く斷ゆる事なかりき。其壽命は七萬年にして此間太陽、月其他天體は其自身の光を縱にするあたはず、晝夜の區別すらなかりき。日中は人や生物皆佛光をうけ、恰かも日輪の光を受くるが如く活動しぬ。而して晝夜の別は朝咲く花、夕に開く花により或は朝になく鳥獸等によりてしりぬ。

人々此佛のみ何故にかゝる特殊の隨相おはすやと審しまんそは彼佛の本願によりて然るのみ、他の諸佛も若し放たんとせば、大千世界或は猶多くの世を照すべき光ましませり。マンガラ佛の光はたゞ其願により、大千世界に滿つるのみ、恰かも他の佛が身をめぐる一尋の光を得たまふに毫も變りなし。さらば何故に此願を立てたまひしや。

マンガラ佛、ヴエサンタラ佛の在世に未だ菩薩の行を行じたまひし時ヴエカ山の如き山中に其妻子と共に住したりき。

一日惡魔カーラダーチカ（鋭き爪）と呼べるもの菩薩が布施行を修せるを聞き、是を試みんとて波羅門の形をよそひ、來りて曰く、「我に汝の二子を與へよ」と、菩薩は快く是に二子を與へぬ。時に大洋も大地も著しく震動したりき。惡鬼大に喜び、二子を捕へ行きて、道の傍の腰掛により立ちつゝ、菩薩の眼前にて、樹根を食ふが如く大口に子等を食ひ終んぬ。菩薩是光景に毫も心動亂せず、些も悲しまざりき、否惡鬼の口より炎とばかり血汐流れし時、我はよくぞ布施せしと大喜滿足して是を惜しまざりき。自ら願ずらく、願はくば我功德もて、一日光明十方に放たしめよ」と、其願により佛たりし時十方あらゆる國土を照すなりと云ふ。（ヴエサンタラジヤータカ）

次に又此御佛によりて植えられし他の功德あり、そは、菩薩たりし時、佛陀の聖堂に詣て、我は我命を佛陀の爲に犧牲にせんと誓ひぬ。而して彼の身體を恰かも炬火の如く卷き百

千金の價ある燈器に淸淨なる油を滿たし、千本の燈心に火をつけて、己が頭より順次に其火を燃え移し、終夜其堂を周行したりき。かくの如く、曉まで努めしかど火は彼の髮一糸をだに燒かざりき、恰かも蓮花の花蕚に入りしが如く、眞實は己を護る人をよく護りぬ。故に世尊は曰く、

法の敎は法の道
あゆむ人こそまもるらめ、
幸さわにめぐまれて、
みめぐみ常に身にそはん、
罪の淵には落さじな。

此等の功德により此佛の身の光は不斷に大千世界に遍滿せん。此佛の時、我等が菩薩（雅雲）は波羅門スルシとして生じたりしが、己が家に佛を招ねかんとて、佛に近づき奉り、佛の快き說法を聽聞して曰く、「佛よ明日願はくは我と共に佛の齋食をとりたまはん事を」と。「波羅門よ汝は幾人の僧を共に招かんとするや」「されば佛は幾人をか常に隨はせらるゝ」其時は折しも第一の會座なりき、されば從つて「億萬の僧」と答へ」たまひぬ。「世尊よ、さらば彼等の總てと共に來りて齋食をとりたまへ世尊は是を諾したまひぬ。

波羅門は佛を招待し奉りてのかへる道すがら思ふやう、我は飯と汁と衣服其他主要なるもの悉く彼等に供養し能ふれど、彼等を入るゝに室なき事は如何にせばや」と、

此思は三百三十六リーグ彼方なるインドラ天使長の大理石の座をして溫かならしめぬ。インドラ呼びて曰く、我座より我を下らしめんとするものは誰ぞや」と彼が聖なる眼をもて遂に菩薩を見とゞめぬ。曰く、「波羅門スルシは佛陀と共に大衆を招ぜんとて室なきを當惑せり、いてや我亦彼處に行きて彼が功德を分たしめんかな」とて神通もて忽ち大工の姿をよそひ、斧を手にもちて菩薩の前にあらはれぬ。曰く、「傭工の入用はなきや」と、菩薩彼を見て曰く、汝は何の仕事を爲すや」と「我は何れも知らぬ業なし、家にまれ堂にまれ、我に建てよとならば、我は建つべし」と答へたり、「いざさらば我は汝を傭ふべし」、「何をなすべきや」「我は億萬の僧を明日招きぬ、汝は彼等總てを座するに足る堂を建つべきや」「安き事かな汝拂はゞ我は之を建てんと諾しぬ、かくて大工は位置を見定めんとて行きぬ。折よく彼處にカンナ場の如く平なる廣さ五十五リーグ斗りなる平地ありき。インドラは其處に眼を据えておもへらく、「土地より幾何の廣さに七の貴き石を積みあげて堂を建てん」、とやがて堂宇は地より湧き出てしと見るまに建立されぬ。金の柱は銀の裝飾あり銀の柱には金の裝飾あり、寶石の柱には珊瑚の裝あり、珊瑚の柱には寶石の裝あり、七寶石もて構造されし柱には同じく七寶の飾あり。次に彼は「堂に小鐘の瓔珞を處々に垂れしめん」と見廻しぬ。とみるまに、小鐘の瓔珞は垂下し來り、其樂音微風に弄せられて、五種の樂器もて奏せるが如き音を發し或は天樂の合奏なりひゞくがごとくなりき。

彼おもへらく、「香と華の花環をかけしめん」と瞬時に花輪は懸りぬ。彼亦おもふよう、「億萬の僧等の椅子や腰掛地より湧き出てよ」と直ちにそれらはあらはれぬ。水桶堂の四隅にあらはれんと願ずれば彼等忽ちあらはれぬ。此等神通の力によ

り悉く備へおへし時、波羅門に行きインドラいひけるは、來れ君よ、汝の堂宇を見よ、而して我に賃金を拂ひたまへ」と、菩薩行きて是を見るにあまりの壯麗に彼の五體は悉く五陪の歡喜もて戰慄したり。

彼此雙なき壯嚴なる堂を眺めつゝおもへらく、此は人力もて爲せる業にあらず、必らずや我善意、善行により、インドラの宮溫を感じ、而して、此堂は天使長インドラの手により、建てられしものぞかし、我はかゝる堂に一日の供養を爲すべきや、我は一周日の供養をこそ爲すべけれ」と

菩薩は外形の財物如何に大なりとも滿足を見出す能はず、彼は王冠を戴ける首を斬り、神聖なる眼を與へ、心臟を裂きて施す等の自身を捨てん事により喜を感じぬ。如何とならば、菩薩嘗てシヴイジャータカに於て彼の都の中央にて日々五斗の金貨を布施せしも、此行は彼の布施に毫も滿足の感を與へざりき。されど反對に天使長インドラ波羅門の姿にて彼に來り、彼の眼を與へよと乞ひし時、彼は是を與へしに心中に笑聲おこりしが彼の心は其爲に毛一筋の廣さだに曲らざりき。されば是事をもてみるに、菩薩の布施に關しては毫も滿足せざるを知る。菩薩思へらく、「我は七日間僧等の爲に供養すべし」とて七日間彼等を其内に請じてガヴアバナとよぶ食事もて供養したりき。こは乳と米と蜂蜜、砂糖、精製せる乳酪もて料理せる美味なり。人々はあまねく此等の大衆に給仕するあたはざれば、天使等かわりて大衆をもてなしぬ。五十リーグの廣さの室とても僧等を悉く入るゝにはいと狹く到底不可能の事なれど、僧等また各其神通により、悉く安らかに座しぬ。其供養の終りの日に總ての僧等の鉢を精製せると然せざるとの乳酪蜂蜜、糖蜜もて滿し、三種の衣服を添へて返しぬ。上衣、外衣等は新發意の僧等にあたへ、得度されし僧等には百千金もて供養しぬ。

世尊スルシに感謝を返したまひし時おもへらく、「此人かくも多くの人を布施し供養しぬ、此人は如何なる者なりや」と、かくて世尊は二アサンキーヤス三千シークルの終りに、彼は佛となり曇曇と名のらんと前知したまひしかば、菩薩に告けたまふやう、かく〳〵の年間を經て汝は曇曇とよべる佛たらんと、菩薩其豫言を聞きおへらく「我はやがて佛となるべく見ゆ、世俗の幕をなす何の利かある、我は出家せん」とて、あらゆる財産を捨てゝ世尊の御手により得度を受けたりき。かくて比丘の生活をなし、佛陀の言葉を學び勝れし能力と果を得たり、彼の生を終りし時ブラマ天に再生したり。マンガラ佛の市はウツタラとよび、彼の父はカーヤ、ウツタラ、彼の母はウツタラ、スデヴハ、ダムマセナは彼の二人の主なる弟子、バーリタは僕、シヴアリー、アソカーは主なる尼弟子にして、ナーガは彼の菩提樹の名なりき。彼の身長は八十八キユービツトの高さあり、彼は九萬歳を經て滅をしめされき。時に大千世界悉く暗黑に變じ、全世界は人々の泣聲と悲歎に閉ざされぬ。

マンガラ佛は世界より
闇を散じて眞實の
燈火を高くかゝげたり。

マンガラ佛の後に、大千世界の闇を散じて世尊スマナはあらはれ給ひぬ。彼亦三度の會座ありき。始めには億萬の僧集まり、第二回には金山に於て九十億萬の大衆集まり、第三には八十億萬の大衆集まりぬ。時に菩薩はウツラとよべる大にて力強きナーガの王なりき。彼佛の出世を聞きし時、彼の一屬を引つれ、ナーガの世界を離れて億萬の大衆を率ゐたまへる佛陀に天の音樂を棒げ、美服二枚づゝを各僧に施しつゝ、彼は三歸依を受けぬ。此時亦世尊は彼に汝は「やがて佛たらん」と豫言したまひぬ。此佛の都はキユーマといひ、スダッタは父シリマーは母サラナー、及びビアービタッタは主なる弟子、ウデナは僕、ソナ及びウバソナーは尼弟子、なりき。菩提樹はナーガとよびぬ。其の身長は九十キユービットの高さあり、壽命は九萬歳なりき。

スマナとよべる御佛は、
マンガラ佛に相次ぎて
現はれましぬ、人天を
凌ぎて高く輝けり。

彼佛の次に世尊レヴアタは現れましぬ。彼亦三度の會座ありき。第一には無數の僧集まりぬ。第二には億萬の大衆集ひ、第三にも同しき數の僧等集ひぬ。其時に菩薩はアチデヴアとよべる波羅門に生れ世尊の說法をきゝて三歸依に住しぬ。彼は高くくみあせし手をあげて佛に五欲を捨つべく請願し僧等に衣服を布施したり。佛此時亦彼を豫言して、汝はやがて佛たらんと宣ひぬ。此佛の都はスダムナヴアチとよび、彼の父はカーチヤヴブラ彼の母はヴブラ、ヴハルナ及ブラマデヴアは弟子の主なるもの、サムバアヴアは其僕、バーダ、スバーダは彼の尼弟子、ナーガ樹は其菩提樹なき。佛の身長は八十キユービットの高さにて、彼の壽命は六萬年なりき。

法名　釋尼證專　俗名　渡邊千代　行年二十五歳

六月廿九日新潟に於て先生に拜眉の際病妻の危篤なるを申上しに御同情に厚き先生は寸暇なきにも不拘病者の爲めに車を狂げられ、親しく大悲本願を傳へらる、且つ一體の木像を病人の嬉びの爲めに枕頭に遺さる。爾來病人は日夜御名を稱しては佛像を仰き、佛像を仰きては念佛を繰び居れり。七月五日より頓に危篤に瀕せり、九日朝六時五十分謹て禮拜の爲めに傍に置きし珠數を探れり、即ち自身の臨終なるを覺りしものなり。

顏色既に生者の色なし、驚ひて全家枕頭に集る、一同念佛合掌す病人は漸に苦しめられ、呼吸甚だ苦し、傍觀に堪へず、然も苦しき中より、手に珠數を掛け、南无……南无……南无……と連呼する事三十分餘にして最後に次男を呼ぶ如し十聲程、蓋し次男は病身にして且つキカンボなるを常に憂慮なし居りし故ならん、其聲微かにして遂絶なり、而して一時呼吸絶へしものの如し、皆な終りならんと思ひしにやゝありて眼を開き極めて細き聲にて曰く、只今夢を見し、非常に美しき處に行きそして美しき佛ましませし、亦た養母と母とは閻魔樣の前に行きヲラジをホイ〳〵と投げ居れりと物語る、蓋し實母と養母との信仰に付きて常に心配致し居れるか故か。自分曰く、おまいは只今御待設けの御淨土へ參らせて貰ふのである兩母及び小供、自分も追て參るぞと申せしに首肯せし後は細き聲にて判明に而も安々と、南無阿彌陀佛々々々々々と十分程稱名を續けしが夫れより眠るが如く約十分にして逝けり、時に七時五十分なり、南無阿彌陀佛、翌十日午前十時三十分之を撮影す。

時を經過するに隨て死者は微笑を帶ぶるが如く見ゆると人々皆な云へり、南無阿彌陀佛。

明治四十三年七月十五日

贈　近角先生　　渡邊萬吉

告白

嗤辻生絲衣夫人

上野啓造

辻夫人は久しく肺を煩はれ、加ふるに兩耳を聾せられ、遂に腦膜炎てふ恐ろしき病に襲はれ、實に悲慘の極み、病苦の絶頂、然に一度如來の光明に接しられてより、心中一點の苦悶なく、悲痛の聲は慚愧と感謝の念佛と變り爲めに傍人病苦の狀を認めず、七月十一日午前一時五十分根岸養生院に於て、念佛聲裡笑を含て、往生淨土の本懷を遂げらる。予は此有難き御緣に逢ふ、實に不可思議の因緣也。左に細述して、如來大慈の廣大不可思議の功德を同信の人と共に讃嘆し奉り、世に同じ御惠の慈光に悅浴せらるゝ人の一人なりとも多からんことを期すれば也。殊に辻氏の遺言なればなり。

辻夫人は本姓は田邊と申され、實姉は東京牛込の柏原文太郎氏の令夫人で、此家で成長されました、一昨年跡見女學校を卒業致され、直に岡山縣備中國淺口郡三和村辻某家に嫁せられましたが、以來は兎角健康勝れず、殆ど病褥に就かれる樣ですから、御兩親及姉樣の御心痛は一方でなく、頻りに上京治療を致す樣促され、昨年七月上京致され、診察を受けられた處が、初期も過ぎた重い肺結核と診斷せられて非常に驚かれ出來る限りの手當を盡され、小田原に轉地養療致されました。此頃既に人間以外偉大の力を求めて居られまして、法華經、バイブル等を讀まれ、諸々の社や寺へ詣て、一心に現世利益を祈て居られたそーです、幸に段々快方に向はれて、本年の一月頃は殆ど健體の樣になられ喜んで居られしに、折々耳に痛みを發し、益々增症致しますから、止むを得ず上京され、岡田博士の治療を受る爲め、三月十七日根岸養生院に入院せられました、私は此時から初て御知合となり、色々と不幸の御話を承り、實に御氣の毒に不堪、何とかして信仰を勸めたいと思ひつゝも機會を得ず、其内に快方に向はれ、退院され、柏原樣の許に居られました。柏原御夫婦は實に眞實自身の子の樣に愛され、求道や色々の有難き本を御進めになり、折々は御讀みになつた事が有つたそーです。

退院後も折々病院に外來で治療致して居られましたが、何分結核性中耳炎と云ふ惡性の病ですから、全く治ると云ふ譯に行かないのです、六月十日頃少しの煩いが動機となり耳の病が俄に增進して左右の耳は全く聞えぬ癈者の悲境に陷られ、驚かれて十五日再入院致されました、此時は神經過敏となられ、精神狀態が前とは全く變て居ました、十六日の朝病室で色々と筆談致しました處が、種々の有難い本を見ましても有難くありません、私程不運の者不幸の者は世の中に有りません、只々身の不幸を悲まれ、世の中の人は無情であると恨まれ、肺の方などは治療の時期を誤たと只

悲みの涙に沈んで居られました。モー私は實に心中御氣の毒に堪へんのです、それから毎日回診の時、院務の餘暇には色々と御話致しました、又熱心に御聞になるのです、併し一々筆談ですから齒痒くて堪らんのです、此頃からは熱心に求道信仰の餘瀝懺悔錄を御讀みになりました。一日近角先生著人生と信仰を御貸し致しました處が、非常に御喜びになり、再三再四繰返し〳〵〳〵讀まれました。二十五日夜に御話に行きました處が云はるゝに、私程罪深き惡人はありません、皆私の爲めに御親切にして下さいました世間の人樣を恨んで計り居りました、全く總て私が惡いのです、誠に申譯がありません、世の中には御親切の人ばかりですねー、と繰返して申され、如來樣は私の樣な者でも御助け下さるですか、誰も皆同じ極樂に行かれますかと色々御尋ねになりましたから、廣大無邊の如來の御慈悲を御話し致しました、大そー御喜びになりまして、念佛を稱えられる計りでした、それから前と同樣に院務の餘假に伺ひまして、共に喜ばして貰ふたのです。實に不思議です、初めから私が故意に强いて務めて御話に行くのではなく、却て向ふから引接さるゝ樣な氣特が致しました、二十九日の朝診察の爲めに伺ひましたら、昨夜は嬉しくて眠られませんでしたと歡喜の狀滿面に溢れ、もう今日からは此身體は如來樣親樣のものですと其喜悅の狀態は書き現はすことは出來ません、昨夜喜びのあまり書きましたと私に下さいましたのは左の通りです。

如來樣の御慈悲は、明暮喜ばして頂き居ながらも、凡夫の淺間しさ、時々此世の出來事に心苦しめ、誠に申上樣なき罪深き身と、一しほ慚愧にたへぬ次第に御座候。此度の病氣にも、何とやら心淋しさを感じ候ひしも、一度先生樣の暖かき御敎に接しまゐらせてよりは、眞の慈父母の御手に救はれし心地致し、心の苦しさもとみに消え去りいとも安らかに日を過させ頂き居候、これ一重に如來大悲の御導と今更の如く有難く感謝涙に咽びまゐらせ候。重る身の不幸も、皆々善知識の御敎化といたゞき居り、今は只專心御念佛申上るのみに御座候、御善巧方便只々不思議と申上る外無之候。

南無阿彌陀佛　南無阿彌陀佛。

昨夜三月號前念命終後念即生の御敎化一しほ有難く頂き申候

二十八日夜喜びのあまりかくは　南無阿彌陀佛

上野先生樣

私は拜見致しまして如來の光明に輝されし樣の感が致し、如來の御慈悲の有難き只々互に念佛を稱ふるばかりでした。嗚呼實に人を恨み不幸を歎かれし悲哀の涙は、罪惡自覺の懺悔の涙と變り、懺悔の涙は即如來大悲の御惠を感謝し奉る歡喜の涙となられたのです、實に罪障功德の體となるです。

釋迦彌陀は慈悲の父母　種々に善巧方便し
われらが無上の信心を　發起せしめたまひけり。
大聖おの〳〵諸共に　凡愚底下の罪人を
逆惡もらさぬ誓願に　方便引入せしめけり。

此御和讃適切に有難くいたゞかして貰ひます。それから後は實に手紙の通り安らかに、感謝の日送りをされて居られました。自然身體の方も力づき右の耳は少しは聞えてきました、と喜びは一方でありませぬでした。

諸行は無常なり是れ生滅の法なり
生滅滅し已れば寂滅を樂とす

あさき夢みし醉ひもせず

之れを手帳に書いておいて讀ては喜で御出になりました。七月二日夜より、突然左耳と左頭半部に劇痛が發して、體溫は四十度に昇り、續て多量の咯血をされるといふ悲慘の有樣となつたので、實に只夢の樣でした。此苦痛悲慘中しかも御喜びの樣子は少しも變りないのです、のみならず、信念の光は却て益々輝くのです、殊に七月三日午後二時頃多量の咯血の際でず、私は寧ろ其虛心平氣なのに驚きました、愴惶彼是と處置致しまして、先づ安靜が第一と申しますと、苦しい咳嗽の間から先生愈々近づきましたねへと申され、只幽かに念佛を稱えらるゝはかりでした。耳一方の病ですれば手術を施すとか方法も有りますが、同時に咯血が有る程ですから、如何とも下すべき術が無いのです。病は益々蔓延し、腦膜炎の症狀を來し、頭腦は張り裂けん計りに痛み、體溫は四十度四十一度を示すと云ふ苦しみの中からも、御自身が念佛して喜ばれるばかりでなく、此有難き御慈悲を人樣にも知らしたいと、周圍の人々に御自分の喜びを頻りに御話しになり、念佛を御誘めになり、殊に御自分が平素から尤も嫌て居らるゝ叔父を枕邊近く御呼びになり、叔父樣一生の御願ですから念佛を稱えて下さいと御頼みになり、叔父の念佛を稱えらるゝ樣子を見て、此上なく御喜びになりました。此有樣ですから、病氣の苦痛が無い樣で、之れが危篤に迫れる病人とは思へない位です、如來の御力の廣大不可思議なるを直接みせて頂きました。

本願力にあひぬれば　空しく過る人ぞなき
功德の寶海みち〳〵て　煩惱の濁水へだてなし。

彌陀の名號となへつゝ　信心まことにうる人は
憶念の心つねにして　佛恩報ずるおもひあり。

南無阿彌陀佛　南無阿彌陀佛

病は既に腦を冒し、加ふるに左肺は大部分冒してあるのですから、呼吸は迫り、昏睡に陷られて居るのですが、左手は既にきかなくなつて居るのです。左手に私が上げました名號と珠數とを固く持て居られ、昏睡の中から折々覺醒されては眺めて、戴ては笑を含て念佛申さるゝのです。此世に於ける最後の七月十日午後一時頃から、前日になく精神が明瞭となられて、色々と御話なされ、近角先生〳〵〳〵と頻りに御待ちになつて居らるゝ樣子ですから、柏原樣は見兼て、丁度先生は御旅行中でしたから、御令弟の近角常音樣に御願致されました處が早速御出て下さいまして、有難き御言葉を書て御示しになりますと、非常に喜て感謝されて念佛を暫らく稱へられ其の儘昏睡に入られました、之れが實に最後でした、其夜の一時頃から全く樣子が變りました、枕邊に御集りの御一同は、只靜に御念佛を稱えて居られました、段々呼吸は幽となり、一時五十分名號と珠數を持たれた儘安らかに眠るが如く往生を遂げられました。集れる者一同御慈悲の廣大を讃嘆し奉りし次第であります。之れが御縁となつて御家內御一同樣が如來大慈の御惠を喜ばるゝ樣になりました。想へば今尙髣髴として彼の御喜びの樣が見える樣です。辻樣は私の善知識であります、思ひ出しては喜ばせて貰ふて居ます、此の如來の御慈悲の廣大不可思議なる功德を世に紹介したいと思ふて、其儘を記した次第であります。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。

今回不慮の水災にて御同朋中には
意外の慘禍に遭遇し給ひし御方も
多數有之べくと存候。乍失禮紙上
にて御見舞ひ申上候也。

求道發行所

信を以て能入となす

綾部りく子

私は去る七月十三日母危篤の報に接し匆皇行李を整へ生前漸く歸國致しました。臨終前後に於ける母の大敎訓は、實に有難く歡喜感謝の涙に暮し、三十一日法會を終り漸に歸京致しました。處が間も無く近角先生の奥樣の御手紙に接し、是非共先日話せし通りを、雜誌に記載せよとの御仰、一時は辿も私の如き無學の者が、尊ひ御雜誌を穢し候事恐入候事と思ひましたが、先生の御仰は御佛の御命令と相感じ、不束を顧みず、有の儘載て頂く事に致しました。

扨私の兩親は生來非常なる篤信家でありましたから、私は小さい時から常に佛檀へ連れて參られ、御佛に御禮申て居り、少し物心地が付きました頃より、暇さへ有れば母が御慈悲の御話をして呉れました。其時分には母と二人に成ると又御法の御話しが出るかと、可成話を外に轉じて居ました處が、十六歲の時母の膝下を離れ東京に出ました。離れますと妙に母が戀敷成り、何となく心淋敷、母上に孝行が仕て見度い、其孝行は唯早く御慈悲を頂き、幾分にても母の心を安じ參らせん者をと存じて居りました。所謂初發心とは此事て御座ましやう、其中明治二十七八年の戰爭に出會ひ、兄二人出發致しました、弟は國に歸り兄に代り家政を執る事となりました、其時弟は母に奬められ、京都文學寮に入學しました事を後て聞き、何だか變に悲しく成りました。外に成る物も澤山有るのに、何とて坊主風情に成つたろう歟、人樣に咄すも耻敷事よ

と内々思ふて居りました。今更思へば何たる淺ましき勿體無い事かと、身の毛がよだつ御耻しき次第で在ります。間も無く兄も戰地より歸りまして、知人の世話にて廿八年の十月只今の夫の寓居大阪に行きました、如來樣の御慈悲は何處迄も御見捨無き者と見へ、夫の申候には自分も誠に佛法が好きで、間さへ有れば佛書を拜見して居る、御身の弟も京都にて佛の修業を致さるゝ由、彼是良き友を得て嬉敷思ふ云々申されました。猶其時分夫の申されますには、自分は誠に變人故迚も家内に滿足を與へ愉快を貪らしむる事は出來ぬ故、何卒精神の修養をして苦樂を俱に致し度者をと申されました。茲に一寸夫の性行を御話して置きますが、夫は誠に素直な人故、人樣に對し一言とて心に思はぬ事は申さず、寧ろ思ふ存分に遣る質で、餘り氣受の惡い方でも無い樣で御座いましたが、只大酒家でそれ計りが誠に氣に成りましたか、其當時は機嫌上戸で別段酒癖とては無く先々樂しき月日を送つて居りました。

翌年三月、夫は臺灣守備として任地に參りました、私は未だ年若くもあり、一人暮す譯にも參らず、色々勘考の末、京都の弟と同居する事に成りました。出發の際夫の申候には、自分は深き考へ有り、御身を京都に遣すなり、其積りにて留守せよ、後に思ひ當る事あらんと。其後私は京都に參り、六條の信者の御婆さんの座敷を借り、弟と二人住居致して居りました、寂莫と無聊が一の動機を造りました者か、此婆さんと御寺に參詣を致します中、追々御同行も出來、文學寮の生徒さんとも交際し、多少佛智の何たる歟を相感じ申候へども、夜間人無き時抔け何となく心元なく、地獄の有樣目に見る心地致し、此儘死なば恐敷處に參る事と存じ其由弟に打明しました處、弟の申すには、姉さん決して落膽するに及ばず、姉上も幾らか佛書を拜見せられし故、縱然身まかり玉ふ共、又々人間界に生を稟け、今生の不備を修養させて頂き、後には御悟りの境界に進み難有き身と成り玉ふ事なるべしと、申聞け候により、やれ〳〵と淺間敷も安心致し、其後空敷月日を過し、二ヶ年の星霜を經、夫は臺灣より歸坂致しました。病に屠れ、暑さに苦みし夫を慰む暇も無く、數閲月の後夫は又もや韓國に赴任致しました、今度は私は國許の母の許に歸り、只管夫の身の上を案じ暮して居りました、母も不愍とや感じけん、以前よりは御慈悲の御話も少なく、時々此世の事は何事にまれ代り勝ち、只代らぬは御誠御慈悲のみにてましませば、何時かは御救下さる事ならんと諦め居りました樣子、生老病死苦時期を見ての說法も耳に入らず、只々くよ〳〵致居候事今更考へますと、誠に其時分の母の心如何樣で御座いましたろう、定めし可憐衆生と思召された事でしやう。

其中夫は病氣にて十ヶ月目に歸國、廣島病院に入院、私は其付添として參る譯に行かず、大阪姉の許にて夫の全快を祈つて居りました、約一ヶ月にて夫は骨と皮計りの樣に痩せ衰へて歸阪致しましたが、迚も御勤も六ッカ敷、休職願を出し、備後の弟の處に足を止め、二ヶ年程休みました。今迄は只夫の留守にて淋敷詫敷暮しまして。苦勞とて言はゞ極單簡の苦勞で御座いましたが、愈夫休職後はそろ〳〵心の苦しみが起りかけました、其れは何樣かと申しますと夫は相變らずの大酒家、又弟は文學寮に在る時腹膜炎に罹り醫者から學問を禁ぜ

られ、保養旁山水放浪の暇備後佛敎中學の先生と成りましたが、一大事の因緣は終始胸中を離れず、當時尤も苦悶の頂點に達した樣子で有りました。元々弟は眞宗の門徒の家に生れ、又一宗の學校へ入り、他力本願の難有きを知りつゝ、何だか學問をすればする程、疑の心起り或は禪にて修養せんかと、丁度禪宗の寺に居りましたから、座禪三昧に身を遊し候へ共、思ふ樣に成らぬ時は是も酒にて鬱憤を霽らし、二人酒浸りにて後には議論花を咲かし、中に挿まる私の心配何に喩へん樣もなく、或時は死を決して夫と弟を慰めん者をと存じました事も度々でして、又いや〳〵死しては眞にあらず、友にあらずと思ひ直し、夫を諫め弟を慰め、兎角暮して居りました、其中夫は大分丈夫に成りましたから、其筋の御召により熊本に復職する事に成り、私も連れられて同地に來りました、其時夫は私の氣苦勞を察しました者か、又別に何か感じた事が有りましてか、一時禁酒致しました。暫くすると今の娘が生れまして、私も始めて喜びの眉を開きました、家内人樣御祝〳〵に夫の禁酒も何時となく敗れ又々酒に親む樣に成りました、子を育てるは親の苦勞と申しますが、生れた娘が至つて病身で御座いまして、十日目から引續き病氣にて二歲の時は一命の六つ箇敷、晝夜看護に疲勞致しました、其時は如何に邪見の私も、此世の親達の御恩と云ふ事を少しは感じさして頂きました、子を持て知る親の恩とは、誠に能く言ふた者で御座います。併し未だ御誠の親樣、大悲如來樣の御恩には氣付かず、只管我子の事而已心配介抱に身を碎きました、私の誠心が通じましたか、子供の重病も全快致しましたが、其後は疳が烈敷、日夜泣明し、又々苦勞が增しました。

其中三十七八年の大戰爭にて夫は出征致しました、間もなく負傷して歸りまして二三ヶ月入院の後、無理に退院致しまして、足の負傷でしたが足引摺乍ら出勤して、隊務を執て居ました。其當時よく月日は覺へませんが、京都より御裏方樣御出被遊、佛敎婦人會を御創めに成りまして、熊本にも夫々支部を設け、坪井の支部長に私を御選擧下さいました、思へば私如き淺しき無學文盲の身分、只の一つも取柄なき者を、御引立下さる事、不思議とも何とも申上樣無き次第、誠とは思はれず、御佛の御導きとは心付かず、始めの程は御冷かし被遊候事と存じましたが、ある御二方の御寺樣兩三度御出被下まして、是非〳〵と御仰被遊御斷りも御聞入下さらず、夫も遣て見よと勵まして呉れましたから、遂に御裏樣を池田驛にて御迎へ申し、新町にて色々の御話を伺ひ、發會式を濟まし御歸洛を御送り申上ました、是が熊本にての婦人會の發端でありました。

其翌月坪井支部にて皆樣の御盡力に預り、坪井支部の發會式を擧げ、御裏方樣の御垂示を拜讀し、拙なき一場の御話を試みました、些しの素養もなき無學の私が、澤山の御人樣の前にて何樣して御話抔が出來ましたろふ、今更思へば御佛の絕體絕命私を逃さぬぞよとの御導きにて御座ひましたろふ、其節實は急病にて席を外さんと存じましたが、淺ましき私も未だ虛ら言申上るは空恐敷、暫時考へさせて頂き、櫻の花の時節で有りましたから、婦人は花の如く心優しく幽婉にして、謙德に富み、内に在つては夫に事へ外に在ては陰乍ら御國の

爲に相盡し申候はんと思付の儘申述べました、實に恐多くて手も足もぶる〳〵振ひました。其夜から私は大變に苦みました、嗚呼我身は何とて支部長を御斷り申さざりし歟、大膽にも御受申し、自ら出來ぬ事を人樣に申上げあたら善男善女の方々を相欺き候事の恐しさよ、明日早速支部長の名前御返し申し、外に尊き御方を御願申候樣申入ましたが、最早御聞入が御座いませんでした、其れから日夜心の苦惱而已にて人樣許りでは無く、日々夫を欺き居るでは無き歟、夫の無理申せし時も兼て言葉を返し候はぬは夫の許さぬ事故、表面は唯い〳〵何事も私が行屆かぬ故偏へに御許し下さいませと謝まり乍ら、心にては何たる無理な夫なるか、我身は當家に嫁付しより以來夫の爲め家の爲め斯く誠心を盡し居候に、少しの御察しもなく、何一つ優しき言葉も懸玉はず、何時も無理ずくめ、嗟々我身は何たる不仕合者かと、夫を恨み、人を嘲ち、只口尖許りにて謝まり申候事、其心中の恐敗さ御耻敗次第では御座います、寧ろ悲敗時は泣き、腹立つ時は有りし儘不足申し候はゞ夫を詐る事も有間敷、去りとて女の申事取上呉れる樣の夫にては無し、如何せんかと日夜苦悶を重ね、或日或方に其由伺ひました處、奥樣其れは人間の持前、決して貴女而已にては無し、其故佛敎とか基督敎とかゞ必要、何卒御修養被下と、御仰に成りました。其れでも未だ〳〵御慈悲には心付かず、否心付ても方角が違ひ、只々御法御說被遊候方の御品行を而已氣を付けて居りました、實に申分なき御方の目前に御出被遊此私に御聞かせ下さらば、必ず御慈悲の頂だかれ候事と而已存候事、誠に生意氣とも、惡人共申樣無き御僧を謗る其罪、空恐敗次第で御座ひました。

其れにも係らず御罰も被らず、斯かる惡人を一層憐れと思召給ひてにやい間もなく東京より近角先生青年會の御招待に應じ、御來臨遊され本日より御演說有る故、參詣せよと支部長の故を以て皆々樣より御手紙を頂きました。其日は陸軍にては乃木閣下の御檢閱日にて、主人事朝から早々出勤致しました、私は其日少々氣分が惡ふ御座ひまして、御同行が御奬め下さいましたが、明日でも御供申候はんとて御斷り申し、夕方御飯の濟みました後下女跡形付する暇に小供を背負ひ、三四丁先きの弟の家に參り青年會なる高等學校の御招待狀を弟に渡して見せました。弟拜見の後申しますには、是は近角先生とて他力の信仰をすゝめられる御方、此御方の御書き被遊候御本姉上の處にも多々有り兄上も御承知の筈、盲龜の浮木少痴を顧ず、早速拜聽に御供仕らんと、其れでも私は未だ〳〵逃腰になり、平常着故後から參らんと申しました處が、弟の申すには御法を聞くに着物抔は平常着で澤山〳〵、さあ參りましやうと弟の嫁と三人參詣仕りました。初めの程は何氣なく伺居ましたが、先生の御熱心なる御演舌にて、如何なる邪見の私も少しは本氣に成り、小供に密柑を剝き與へ抔して聞て居りました、其時下女も後ればせに參りましたから、子供を下女に渡し、私は膝を乘出して伺ひました。其時先生は涙を浮べ申されますには、實に人間程淺間敷は無く、佛の目から御覽被遊候時は、只一つの誠心とては無く、同情心とて自分を離れては少しも無く、所謂自利の爲の同情に過ぎず、例へば彼の人は實に氣の毒な先づ我身が彼樣な境遇に當らば如何

ならんと自分に引較べ、始めて人樣に同情の念が起る者である、又世間にて立派なる者を名譽と申すも、此名譽も餘り奇麗なる者には非ず、人に良く申され、人に褒められ度心より起る劣情に外ならず、去れば人間には少しも誠心無く、只々御佛の御慈悲こそ末通りたる御誠心云々申されました、實に其時の御言葉は必至と私の胸に應へました。

私の母は誠に優しき人にて、我々を育て呉れましたから、遺傳と感應とやらにて、我等も自然同情心は有る者、又名譽とは人間最上の良き者と心得て居りましたに、今先生の御仰にて愈人間は誠心なき罪惡の固まり也しかと悄々と歸りましたが、其時から私の心の苦みは中々て有りまして、翌日更に淨行寺に同先生の法話を聞きに參りました、詣りまするとの傍の或奥樣が如何にも御殊勝に御珠數を懸け、如來樣に惚れ〳〵と御禮を申して居られましたのを見まして、私の姿の淺間敷鬼々敗に耻ぢました、其奥樣が長尾樣とて信者の御一人で其後引續き今日迄御恩に預つて居ります御方て御座います。間もなく先生の御演舌が始まりました、其時の一伍一什は記憶しませんが、唯身を捨てゝ法を求めよと御仰に成りましたのが、主眼の樣に存じて居ります、御演舌後御庭にて一同撮影致し其夜は先生の御別れに莅みました、其節不審の點、先生に御伺致し度存じましたが、未だ〳〵人目が耻敗、夜十時歸宅致しました、其夜も我身の罪惡を繰返し、二時間程にて目を覺しました。

翌日乃木閣下も御立に相成將校婦人會の資格にて御見送り申し、其足にて池田驛に至り更に先生を御見送り申しました、御演舌は伺ひましたが未だ御挨拶も申さず、知らぬ御方なるに御別れに臨み親に別れ候心地が致しまして、何となく御跡が慕れまして思はず涙が頰を傳ひ、拭けども〳〵後から〳〵涙湧き出て、人目も耻ぢず其儘人車にて歸りました、車の上より實に〳〵世の中が嫌になり、悲敗共淋敗共何に喩へん樣も無く、歸宅致しました。其日は夫も乃木閣下を送りまして御休みて宅に居りました、何時もならば御話申す處て御座いますのに、此日に限り默然と涙許り出まして、小供も蒼蠅く下女が物聞き候ても、最も邪見に返事致しますから久敗私に事へ實母より私を便りに致して居りましたに何事の起りしかと下女も變な事と思ひ、餘程心配をして居りました、夫も亦何故然るかを知らず、實に婦人に有るまじき擧動哉と叱り付、聞きました。私も最早包むに術なく、夫に有の儘を申述べました、夫は其れは何より結構の事、朝から晩迄箸を執るも、床に入るも、御念佛申せと申しました。私は又其時夫を恨みました、貴方は出來ぬ事のみ仰せられて人を御咎め被成ます、御自分の出來ぬ事が私に出來ますか其樣な事仰なく、早く御慈悲の頂だける樣に、御咄して下さいましと申しました。成れ共夫は其時取合て呉れませず、去りとて私は片時も峙つとして居られませぬから、御近處の御寺に參り御法話を伺ひに參りました。生憎皆樣御留守にて空敗歸り、其夜を泣明し、食事も進まず、人無き處にて佛書拜見致しました、益疑ひの念起り、如來樣は御慈悲の御方、何とて斯く久敗私を御助け下さらぬかと勿體なくも親樣迄御恨み申しました。

夕方夫の食事濟むなり、何卒今夜如來樣の御慈悲を必ず頂

だける樣に、御佛に成り換り御諭し下されませと申しました。夫も席を改め、色々手を換へ御諭し下さいましたが、中々安心が出來ません、後には夫も腹を立て是丈申して未だ疑が霽れぬ御身、餘程分らぬ嚥氣者、左樣の嚥氣者とは知らず自分は今迄精神の妻と愛し居りしが、嗟乎今夜限り愛想が盡きた、最早精神の妻に非ず、併し子迄有る事故離緣すとは申さず、子供を育て家の世話を爲すべし、何事も申聞す必要なしとて其儘床に入りました。暫時私は呆然として居ましたが、一時に悲敗成りまして涙は瀧の如く聲を忍んで泣き伏しました、何たる淺間敗事ならん、近角先生は身を捨てゝ法を求めよと御仰あり、夫は今夜ぎり精神の妻に非ずと言はる、遮莫夫を捨て子供を捨て今より京都に出で本願寺の下女となりても御法を聞かん者をと陰に決心致し、傍に無心に母の苦しみを知らずすや〳〵と眠りし我子の顏を見ては、決心も鈍り去り、さりとて連れて行けば足手纏ひ、去りとて此儘此家に在るは妾同然、如何せんかと心も茫と成りましたから、傍に有る卷烟草手に取り見ましたが、否な〳〵烟草一本も夫の物何たる悲敗事哉と、二時間程石の如く考へ居りましたが、俄に夫の枕邊に參り貴方今迄の御情に今一度如來の御慈悲を御說下さい、私一生の御願ひで御座いますと申ました。

夫も其の時迄眞には眠つては居りませぬ樣子、早速起出又々色々御話して呉れました、其時夫の申しますには、御前は如來樣とて別に西方淨土に御出の物と思ふて居る歟、如來は絕對無限なる物にて何處にも玆處にも慈悲の光明照し普ねく廣大無邊にして時間と空間に充ち滿ち玉ひ、常に衆生を御濟度まします、ソラ开處にも玆處にもと私の周圍を指さし、且申するには、全體其方は夫の申す事を疑ひ信ぜぬが罪の基である、昔から夫を所天と言て、有形の天である、其夫の言葉を信ずる事の出來ない者が無形の如來の御諭しが信ぜられる道理なし、信を以て能入とすてふ言葉も此間の消息に外なしと申しました。其時何となく家の內が明るく大變廣々とした心地が致しまして、夫が如來樣に見へ一時に心の中喜びに滿ち夫の前に泣き伏し、實に〳〵と謝り果てました、嗚乎私は何たる闇太い惡人て御座いましやう、斯る者を是迄永き間御見捨無く見守り下され、何共御禮の申樣無く南無阿彌陀佛〳〵と始めて御他力の御念佛が出まして、何たる御慈悲の夫なるか是迄腹の立つ時恨み嘲ちし事の淺ましさよ、世間普通の親切なる優さしき夫ならば、迚も今晩の如き御慈悲に預る事覺束無かるべし、實に夫は私の爲には善智識也けりと苦悶の涙は嬉し涙と變じ、夫の前に手を付き實に今迄何共申樣なき淺間敗心にて、御恨申上て居りました、斯かる者を能くこそ是迄御置下されました、貴方の無理を御仰有るも皆々私の心から誠に謝り果ましたと、御禮を申しました。

夫も小踊して喜んで呉れました、其時感じさして頂きました御佛の御光に接してより以來心から懺悔申上、是迄我身を善き物とし人心のみ御恨申し、何共御耻敗次第て御座います。其翌日からは何と無く嬉敗何方樣に御目に懸り懺悔御物語申上度、立ても居ても溜らず、全切狂氣せし如く、餘り甚しかりし故、弟に申しましたら、姉上御文樣の牛窃人と言はるゝ共法を得し振りするなと御戒めの御言葉有り、何も人樣に御懺

悔申さず共、心の中にて御佛に對し御懺悔遊ばせと戒めて呉れました。其後北海道に參る事になりまして、明日出發と申す其夜、夫は甚敗重病に罹り半死半生て壹ヶ月程手當を致しました後押て出發任地に參りましたが、ぶら〳〵二ヶ年程にして豫備被仰付、只今の處に住居致して居ります。實に入信させて頂きし後は不思議に心配な事が起りましても何時も〳〵御佛の慰め玉はり御催促に逢奉りしと念相續させて頂き、日々心安く過しました、其からは夫も誠に氣長く、大變親切の人に變り、能く家の世話、子供の危介を見て呉れます樣に成りましたも、偏に〳〵御親樣の御惠と感謝の涙だに呉れて居ます、誠に近角先生の御恩は御念佛させて頂く時に味はせて頂いて居ります。

餘り長くなりまして恐入ますが先生の御仰に長ひ分は幾ら長くても宜敗との事故不文を顧みず序に母の死の前後の有樣書かせて頂きます。私は初め申しました通り十三日出發十五日夜九時鄕里大分に歸りまして、直に母の枕元に參りまして、挨拶を致しました、本年三月看護の爲め參りました時とは大變異りまして、實に衰弱骨と皮計りに相成目も當られぬ姿、併し御顏は左程でも有りませんでした、私は一目見るなり胸塞がり、母上只今東京から參上致しました、御判りに成りますかと申しましたが、母は涙をバラ〳〵と流し、點頭きました母上最早暫時の御苦しみ、今に結構の御身に成して頂きます。よ、御恩御喜び被遊よと申しましたら、母は大變嬉しそふに口を搖かしました、何でも私の歸國を待ち、息引取る事と國に居る兄姉が思ひ居りし由なるが、俗に申しまする死の花とやらにて、其翌日は少々宜敗御座いました。併し熊本から出向きました弟が、俄に發熱四十一度以上に昇り大變苦しみましたから、皆々相談の上私の姪を弟の看護に附け、姉と私兄と嫂と四人母の枕許に附添ひ居りました、私は絕へず御和讃を拜讀して母に聽かせて遣りました。十七十八の兩日は早昏睡狀態にて時々早く〳〵と二聲つゞ申しました、少々苦しむ時は御和讃を頂きますれば直ぐにすや〳〵睡りました。其夜九時頃私は姉と交代食事をして居りましたら、姉が一寸〳〵と申しますから、私は病室に驅付けましたら、母上先刻から右の御手にて早く〳〵是此通り起して呉れと御仰ある樣子、如何せん乎と相談申しますから斯る大病人を起す事一大事也、先づ兄上に相談せんとする中も早く〳〵と切れ〳〵に申され兄が聞き付御起し申候はゞ、後が大變、御苦敗共御我慢〳〵と申候中にも矢張早く〳〵と申されますから、詮方なく一寸靜に御起し申さんと四五人にて起し參らせ、御佛檀に御明りを差上ましたら、母は實に嬉しそふに御手を合せて居りましたが、俄に目を引吊り今にも息引取り候かと御念佛して居りましたら、又既に息吹返し喉に痰引掛り斷末魔の有樣に候ひしが、其れも一時間後蘇歸りました、丁度十時頃でしたか、弟が姉さん〳〵と叫びますから、姉と私同時に誰いと申しましたら綾部の姉さん私は熱に浮かされ只今迄貴女の御和讃を聽き乍ら睡り居りましたら二度迄御淨土の夢を見ました、其結構なる事、迚も御話に申されませんと言ひ、又々昏睡囈語而已申し嗟乎母上は今御淨土に御參り遊ばした、嗚乎甘ひ事を爲さつたと、三途苦難長く閉ぢの御和讃を大聲にて囈言に申し居ま

した、其時私は潑と胸に感じました母上二度蘇り玉ひしは弟の夢の通り、母上御口利けず弟を病氣させて弟をして自分の行先を口走らしめ玉ひしに非ざるか、同時に又何故母上は二度迄も蘇返り給ひしか、只事ならず兄姉が未だ御慈悲に心付かぬ故にやあるらん、承り候へば今より一ヶ月程前皆々を病室に集め、御前達は御法を聽かぬか〳〵と大變身を藻掻き責め玉ひ、皆々恐入り、必ず今に御聞き申ますと漸く母を宥め申候由、兄より聞きましたが、母上此世に生れ給ひし任務を果し玉はず、斯く幾度も蘇返り玉ふらんと存じました。

其夜十二時頃、今度こそは愈々御臨終と存じましたから、皆々御枕邊に傳ひ、御顏を見守り居りました、早く寛をと兄が弟を起し參りし時、實に四十一二度の大病人母の別れを悲しみ如何相成事かと心配致しました、其中段々と御脈代り候へ共何か御心殘り遊ばしおる樣子、乘々皆々樣に御法聞かせんと其事のみ御仰有りましたから、私病人の弟に向ひ御身母上の御臨終に當り、母上に代り如來樣之御慈悲御說き下さいませと申しましたら、弟も苦敷中から心を引立、有難御咄申出ました處、母の今はに兄も姉も嫂も姪も甥も一時に居睡り出し誠に氣の毒て此一大事の時睡るとは何事ぞと拳を握りました、余程耐へ難くや有りけん兄も鳥渡手枕に横に成りましたら、居睡を始めました、私は最早溜らず私の左側に居ります姪の膝を撮りました、御祖母上一命の御大事に御身達に御慈悲を聞かせんと、何度蘇返り遊ばすに、睡るとは何事ぞと、氣色を變へて申しましたら搜と姪は潑とせし樣子、兄は三分間位にて飛起き、嗚乎夢を見た今、大變恐ろ敷物が自分の頭を全呑にする處を、母上お助け下されました、其時弟が兄上何たる不思議ぞ兄上眠り玉ひし間二分か三分兄上に早くお慈悲を聞けとのお知らせて、私と姉との胸にはひし〳〵とお知らせが有りますと申しましたら、兄も姉も一時に泣出し、身を入れて聞て呉れました、其時は最早朝の六時て母は虫の樣なる息てお座いました、私と弟とはお念佛申上ました、一一の花の中よりは三十六百千億の佛心も光りも等しくて、相好金山の如くなり、之お和讃を頂き居りました、誠に不思議なるは四十一二度もある病人の弟が、母上臨終と聞き氣分も淸々と斯く侍べり申候事て御座います。

朝九時頃には愈御息止りましたから、靜に御手を合せ、御珠數懸させ參らせました、皆々泣叫び悲みましたが、私は母上今一度御蘇返成されますと申しました、何となく私は左樣の心地が致しました、實に御佛のお告にや果して私の申せし如く十一時に又々兩手を合せ玉ひし右之お手を上げ珠數より徐ろ〳〵胸の處迄擧げ玉ひ、微のお聲にて早く〳〵と申されました、兄も姉も餘りの事に母の面前にて母上斯く我々を思召下さる事、眞身に徹しお懺悔申候、必ずお慈悲を空ふせず母上のお後慕ひお淨土に參らせて頂きますと難有母上を拜み悲嘆の涙に旦れました、東京の長兄は寺內大臣關東お出發前後にて此臨終の間に合ひませんでした、其朝電報にて今わの時正躬と(長兄の名)一言申して呉れと東京から申來りましたから、お往生の時母上正躬でお座いますと申上ましたら、お目を潑りお開被遊、涙はら〳〵お溢し被成ました、平生母上のお慈悲に引入玉ひしお方も驅付遊ばしましたから、母は

一々頤にて御挨拶被成ました、正午十二時愈大往生を遂げられ淨土之客となられました、皆々悲嘆の涙に暮れましたが、私と弟は只今御佛の母上を引取り玉ふ時嬉し涙に難有、拜みました。併し佛力を離れ本心に立歸りました時は、實に悲敷人無き處て思ふ存分泣きました、人並勝れし慈悲深き母上に別れ參らせ、殊に我々を導き賜はりし御方、母とは思はれず、二人手を採り相共に泣きました、不圖心付母上の死顏拜みましたら其氣高き事、今迄の母上の御顏とは見參らせず、我々を御教訓下され候としか見申されず覺へず形を正しました、其夜御湯棺の時未だ暖かにて翌二十一日吊い前一寸御死骸拜しましたが、少しの變りもありませず、實に〳〵火葬にするが惜しき樣にて御座ひました、何分人に知られし信者の事故、誰も〳〵氣を付けて居りましたと見へ、母上死去と共に西風なりしが火葬の際其烟東より次第〳〵に西へと運び、日暮西の雲何共申上樣なく奇麗に相成、棚引渡り候由、人々の御仰せに候、猶其夜は舊歷十五夜にて月輪皎々と照し玉ひ皆々不思議の思ひを致しました。

實に今度母のみまかりました後、取り出したる法名を拜見致しますると、滿德院釋常觀大姉とあります、私はひしと胸に應へました、其譯は近角先生の御名前が文字の中に顯れて居るからであります、餘りの不思議さに兄に尋ねましたら、明治十七年京都に父母上京の節御法主樣に頂きし御直筆の由誠に不思議の因緣て御座います。先生と申し母と申し私等の爲め御佛の御差向下されし事と深く御喜び申して居ります。弟も先生の御陰にて大曾御慈光を喜ぶ身と成らせて頂き、殊に今度母の臨終に兄弟相會し、共に御恩を喜ばせて頂きました、又東京の兄の子が陸軍中尉て支那に參り居りました處、丁度一七日の御經の處に歸て參りました、偏に御佛の御護て有ります、歸京後近角先生より雜誌に記載せよとの御手紙、只何事も偶然と申せば其れ迄に候へ共、信心の上から申せば不思議〳〵の御惠と申より外ありません、大變長く成りまして定めし御聞き苦敷御座いましたろふ。南無阿彌陀佛〳〵。

爾後の傳道日割

八月十四日ヨリ廿二日迄　琉球

同二十三日ヨリ二十九日迄　九州各地

（內二十五、六日福岡縣嘉穗郡大隈町有田廣氏方）

同卅日以後凡廿日間　朝鮮各地

雜　錄

歎異鈔につきて

近角常觀

世の一般青年及び學生が信仰に入らむとするに當りて門戸を誤らざるものは稀なり、誤り易き點に二あり。

一には宇宙問題と關聯して佛陀を思考す宇宙の本體是佛陀にして宇宙の現象是其作用なりとなすが如し。二には倫理問題に關聯して佛陀を思考す、即宇宙の本體を佛陀なりと假定して、之を行爲の理想となし標準となすが如し。余は毎年夏期本講習會に出づるを無上の樂しみとなす、恰松島にて開催せる第七回夏期講習會迄は前述の如き宇宙の問題及倫理問題と如來とを關聯せしめ之を尊無過上の信仰と思惟し常に人には善を爲すべし、敵を愛するの心懸なかるべからずとして之を實際に行ひ來れり、然るに世の人を見るに我の如く行へる者は一人もなし、自己は此位迄に人に盡せるにも拘はらず、他人は時としては恩に報ゆるに怨を以てすることすらあり、此に於て自己は從來の心持より一變して却て人の敵となるに至れり、煩悶懊惱癒ゆる處を知らず、誰か自己のこの悶える心中を洞察して汝は罪人なり、至て不愍なるものなりと余に同情を寄する友人はなきかと、煩悶の結果枕に就く身となり、親しき父母の慰めも自分には何等の効なく、日夜轉々憂苦措く能はざりき。是從來の信仰の誤れるに基づけるなりき、從來宇宙や倫理の問題と關係して得たりとなしたる信仰は未だ眞の信仰にはあらざりき、是誤れる信仰にして心内に描きたる假定的の佛陀に對せる空の信仰なりしものにして、未だ以て實世間の罪惡の渦中に沈淪せる吾人を罪惡の渦中より救ふこと能はざる信仰なりき、誰れか余に一人の同情者なきか、余は今日迄人の爲には名譽をも捨てたり、然るに世の人は皆自己中心なり、斯く思惟せる時今日迄余が引立て遣りたる輩は地位を變じて余を引立つる樣に見られ、嫉妬憎惡の焔炎々として罪惡煩惱の塊となり了せり、而も之を如何にして解脱し涅槃に入るを得べきか、宇宙問題にて之を解決せんとして得ず、倫理問題亦之を解決し得ず、誰れか余とこの苦しみを共にすべきものはなきか、血に絶叫したる折しもあれ、突然而かも靜かに自己心内に不思議なる同情ある友人の入來れるあり誰れぞや、他なし是阿彌陀如來にて在ますなりき、余は茲に實際に信仰を得たるなり、余の常に、宗敎は實驗的ならざるべからずと云ふは蓋し此間の消息なり、實に釋尊は太子たりし時生老病死の人生の實際問題の解決に苦しみて遂ひに出家したまへり、釋尊成道の出發點は人生の實際問題に存せるなりき、生死の問題は學問の有無に關せず、將た貴賤、老若、男女に關せず、一樣に平等なり、吾人往生の用心は宇宙問題にも在らず、倫理問題にも在らず、實に人生問題に在りて存するなり。

宗敎とは絶對無限の如來と相對有限の衆生と相關聯する是なり、倫理的行爲の理想なり標準なりと稱する聖賢も是れ矢張衆生たるなり、衆生と如來と關係しその心に於て融合す、宗敎の難有味は實に茲に存するなり。

既に岸に登れるは如來なり、深淵に流めるは衆生なり、慈悲溢れたる如來如何にして深淵に苦める衆生を冷然と見殺しするに忍びんや。

如來ならでは與ふること能はざるものを余之を人に求めたり而も得ず、却て嫉妬憎惡に燃えたりき、余は敵を愛せんとしたり、然るに余は敵ならざる人を余の敵と見做したるなり、我こそ眞に敵なりき、この我を如來は愛し給ふなり、眞に敵を愛するは如來ならでは出來難し、吾人はこの如來の慈悲の力に依て往生を遂ぐるなり、他力信仰とは即是なり。

然るに他力信仰の用心古來往々誤りを生ず、誤れる信仰に住するものを歎きて、正信に住せしめんとして書かれたるもの是此『歎異鈔』なり。

惡しき者を可哀想なりとて救ふて下さるのだと思ふべし。惡るくつても救ふて下さるのだと思ふべからず。又惡るい者を助けて下さるのだから、成る可く善い行ひをしなければならぬと思ふべからず。如來の本願は惡しき者を救ひ給ふに在り『歎異鈔』の要旨此に在り。

因に『歎異鈔』の解釋法を說かん、『歎異鈔』全十八章中、第九章は唯圓房の自督にして、第十章は異義を出す。其他第一章より第八章に至るものと、第十一章より第十八章に至るものとは彼比相對す、大切の證文と云は最初の八章即親鸞聖人の文を云ふなり。御聖敎とは『敎行信證』のことなり。初めの序に先師と云ふは如信上人のことなり、而して此章の選述者は唯圓房なりと知るべし、親鸞聖人の正統なる信仰を傳承したる如信上人は六十二歲にして入滅し給ひければ後世その信仰の正統を失はむことを憂ひ給ひて血の涙をしぼりて記されたるもの即ち此『歎異鈔』なり。

次に『歎異鈔』の第二章、第三章に就きてその概旨を述べんとす。

第二章は誓願に就ての心得を述べたるものにして、親鸞は誓願の理を知りて信ずるにあらず、如來の廣大無邊なる慈悲の御心を頂きて念佛するより外になきなりと申されたるが如く、如來誓願の道理を了解したればとて眞の信仰に入りたるにはあらざるなりと知るべし。

第三章は彌陀の名號に就ての心得を述べたるものにして、いかに殊勝げに念佛を唱ふるとも眞の信仰に入りたるにはあらざるなりと知るべし。

法然聖人は『選擇本願念佛集』を選述し給へり、その意は衆生には布施、持戒等の六度の修行の如きは到底なし得ざる難事なり、如來の御力を賴みとして往生を遂ぐべきは一向念佛の一行に在りと敎ゆるに在り、法然聖人四十三の時迄種々の事を行じ給ひしかども未だ以て成佛の本懷を遂ぐる能はずと歎き給ひける時、不圖善導大師の著書に『一心專念彌陀名號行住坐臥不問時節久近念々不捨者是名正定業順彼佛願故』。とあるを讀み給ひて忽ち念佛の一行を以て往生を遂ぐるの要道とし給ひしと、捨閉閣抛とは是れなり。

例せば美服を着ても似つかぬ、又着ても直ちに汗にて汚すと云ふが如き其子供に手織の着物を與へたるが如し。子は親

のその衷心を知ると雖も之を身に着けずんば、未だ眞の親心を受けたるものにあらず、誓願の道理のみを知り以て眞の信仰を得たりとする者此の如し。又親は此衣服を着よと命ぜり。而も自分は他の美服を着るの資格ありと雖も親の命なるが故に之を着る。自分は親孝行なりと殊勝げに振舞ふ、これ亦以て未だ眞の親心を受けたるものにあらざるなり、余は念佛宗なるが故に唱名すとて殊勝氣に振舞ひ眞の信仰を得たりとするもの亦斯の如し、共に未だ信仰の正鵠を得たるものにはあらざるなり。

如來の本願は罪惡の衆生を救濟し給ふに在るなり。君の爲に拵へたる御馳走は何ぞ徒らに遠慮して之を食せざるを得んや中心喜んで誰もこれを頂戴すべきなり。然るに徒らに之を遠慮し、又は何の感謝する處もなく之を無遠慮に食する等のことは是未だ自分の爲に拵へられしと云ふ親切心を知らざるものと云ふべし、その自分の爲に拵へられたる難有さを感謝しつゝ食らふは是眞に食するものなり。

人よ誤て邪信に陷るなかれ、『歎異鈔』の要旨とする所概ね是の如し。（中外日報）

時報

其後の傳道慨況

前號豫報の順序を以て近角は東北、北越方面の傳道を卒へ七月廿四日學舍講話に間に合ふ可く同日早朝歸京、直ちに臨時講話を開席す。此日朝來の激雨なりしに係はらず、意外に多數の御同朋來集せられ、近角は旅中處々にて遭遇せる幾多信仰上の嚴肅なる事例に就きて眞心徹到の眞味を披瀝し、如來大慈父の眞に我等が爲め大慈父にて在します所以を讃仰し奉る。說く者聽く者共に、久し振りの開講にて、感特に新なり。猶ほ講後特に談話會を開催して、十數日前身まかり給ひける故辻生絲衣夫人の入信及び往生當時の狀況に就き、君が無二の信友にして、又治療の任に當られたる上野啓造氏の談話を請ふ。夫人は年齡未だ漸く二十有三、其の激惡なる病苦中、安祥として法悅歡喜、信心の一路を辿りてひたすら他の喜ぶを喜ばるゝの狀、及び其の病床の片言雙語も大慈悲の顯現ならざるは無く、聽く者何れも涙を拭ふ。（本號告白欄參照）了りて午後近角は巢鴨監獄に出席談話。夜再び辻夫人の遺志に基き、柏原氏及令夫人の發起にて、夫人の追吊法莚を開く。遺族及同朋の來會あり。讀經禮拜燒香の後ち、近角は夫人の遺書に、玉日君御遺狀を對比し、他力信仰の奧秘を讃仰す。散會したるは十一時なりき。而して其翌二十五日は終日家に在りて、在京御同朋の來訪を受け、翌二十六日未明、大磯大日本佛敎青年會向け、再び傳道の途に上りたり。爾後の詳報は他日を期す。

故清澤滿之師序　近角常觀著

訂正增補

信仰之餘瀝

第拾壹版

定價卅錢　郵稅四金　袖珍美本

本書は著者が十餘年前端なくも苦悶の暗黑界に彷徨して、憂惱其極に達し、最後に佛陀靈活の慈光に浴して半歲の迷雲一時に消散したる時、自ら其心的經過を跡づけて、懺悔感謝の至情を表白したるもの、文字に些の修飾を加へず、ひたすら內心實感の披瀝に努めたるは既に諸君の知了せらるゝ處なり。而して幸に發行以來江湖同朋の愛讀一日も絕ゆる事なく、今や其の十一版を出すに及び、本書を緣として入信せられたる諸君の多數なるは吾人の私に感謝措く能はざる所、而して先きに第十版を出すに際し根本より版を改め、誤植訂正は勿論、新に增補する處六篇あり、猶ほ最後に著者が爾後の信仰經過を告白して、附錄として『予が信仰的實驗』なる一篇を加へぬ。蓋し著者が信仰の根底は本書に於て明かならん。

第二版

信仰之餘瀝要略

本書は某師の勸誘により、有志諸君が傳道求道の資に供せんが爲に『信仰之餘瀝』中の眼目「宗敎的同朋」「活ける懺悔」「信界に於ける監獄」以下二章を拔萃し、傳道用小施本として印刷したるものなり。傳道に志し給ふ諸君の御試用を切望す。

定價五錢　郵稅二錢（但し四冊迄は郵稅二錢也）

部數に應し充分割引す

右久しく品切の處今回出來仕候也

發行所　東京市本郷區森川町一番地　振替口座東京一六六九六番　求道發行所

近角常觀著作

親鸞聖人の信仰

本書は嘗て本誌に連載せる、「眞宗慶嘆」に大訂正を加へて一書に纏めたるものなり。絶對他力信仰の大權化たる親鸞聖人一代の教證に對し、著者が平生抱懷せる渴仰、尊崇、憧憬の至情は本書に溢れて餘蘊無し。

第貳版　定價七拾錢
小句料八錢
クロース級

人生と信仰

◎第一章　人生問題と信仰　◎第二章　悲觀思想と信仰　◎第三章　倫理力行と信仰　◎第四章　犯罪心理と信仰
◎第五章　社會問題と信仰　◎第六章　國家秩序と信仰　◎第七章　世界宇宙と信仰

本書內容は目次示すが如し。先年『求道』秋季號として發行したるもの近時四方同胞諸子の需要益々急切なるため、再び茲に一冊として刊行するに至りぬ。蓋し現代思想界の亂調は律法的教訓、若しくは物質的施設を以て根治する事難かるべし。獨り信仰により根本的に自覺して、初めて解脫せる眞人生に入る事を得ん。是れ本書ある所以也。人生問題の解決に志ある諸君の一讀を冀ふ。

第參版　定價廿錢
郵稅四錢
珍袖美本

懺悔錄　附錄『歎異鈔』

本書は著者が實驗の信味に基づき、古來求道者の金科玉條たる『歎異鈔』の眞髓、惡人救濟の眞意義を闡明せんが爲に編述したるものにして、著者は先づ自己の經驗に筆を起し、半歲以上胸中に鬱積して寸時も止まざりし煩悶の實狀と最後に拂陀攝取の慈光に接して人生の黑闇頓に一掃せる感謝の實感とを最も眞率精細に告白し、更に進みて之を王舍城の悲劇に照し、又著者が實驗を聞きて獄中大安慰を得給へる某氏の實例に見、人間何人と雖も如來慈光の下唯一救濟の一道ある所以を叮嚀懇切に詳述したり。蓋し之れ『懺悔錄』の名ある所以にして一讀入信の人少なからず

第六版　定價廿錢
郵稅貳錢
珍袖美本

申込所　東京市本郷區森川町一番地　振替口座東京一六六九六番　求道發行所

再版

前田博士題字　泉文學士叙傳

よろこびの跡

近角常觀序　故管瀨夫人日誌

紙數二百廿頁　定價十錢　郵稅部數以上割引二錢

本書は昨年求道第九、十兩號に亘り告白欄に其の一部を掲載せる故管瀨令夫人の日記を輯錄し紀念の爲め出版せるものなり。夫人の日誌が飾るなく僞るなく、信仰より來る日常生活其儘の告白なる事は既に本誌讀者の知了せらるゝ處なる、今や更に次版なる、道友諸君の一讀を勸告す。

施本用小冊子

近角常觀校訂　（部數に應じ充分割引す）

冠頭　歎異鈔

第四版

定價五錢　郵稅四冊迄二錢

此の「歎異鈔」は讀み易きよう字をまばらに植え、校正を嚴密になし、且つ冠頭を加へて諸聖敎中より參照すべき要文を引用し、叮嚀懇切に作りたるものなり。

近角常觀校訂　（部數に應じ充分割引す）

冠頭　唯信鈔文意

新版

定價七錢　郵稅三冊迄貳錢

「唯信鈔」は親鸞聖人の法契聖覺法印の述作にして、「唯信鈔文意」は聖人特に本鈔を尊重して、其文意を講授し給へるものなり。聖人に文意の作あるに見ても本鈔の他力信仰上如何に貴重の聖典たるかは知るに足らん。本所今此の兩書を一冊にまとめて刊行す。冠頭を加へて參照用文を引用したる等凡て歎異鈔に同じ。同朋諸君の精讀を勸む。

發行所　東京市本郷區森川町振替口座一六九六番　求道發行所

規定

一　本誌は毎月一回十五日發行とす
一　本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
一　本誌の代金は可成振替貯金口座にて御送金の事、郵便爲替にて御送金の節は爲替振込局は必ず「本郷森川町郵便局」宛の事
一　郵券代用の節は五厘切手にて一割增の事
一　凡て送金受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし
一　本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所を通知する事
一　回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
一　本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	郵稅一冊に付五厘
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	

◎廣告料五號活字一行（二十七字詰）一回金拾錢

明治四十三年八月十二日印刷
明治四十三年八月十五日發行

發行兼編輯人　近角常觀
印刷人　白土幸力
東京市本郷區森川町一番地

發行所　求道發行所
（振替口座東京一六六九六番）
東京市神田區表神保町

大賣捌所　東京堂

前號要目

求道

◎誓願の親心　講話　近角常觀

◎業と惠　聖傳

◎ヂヤータカ釋尊傳　久遠劫の昔

告白

◎憂き事多きは吾身なり　渡邊萬吉

◎極易行の佛念　逸名氏

雜錄

◎眞宗と婦人　近角常觀

◎唯念佛　近角常觀

時報

◎傳道日乘◎爾後の傳道日割

◎夏期に於ける青年の修養　近角常觀

求道第七卷第六號　明治四十年十一月十二日第三種郵便物認可　明治四十三年八月十五日發行（毎月一回十五日發行）

東京西神田區發土代町二ノ一三大谷方